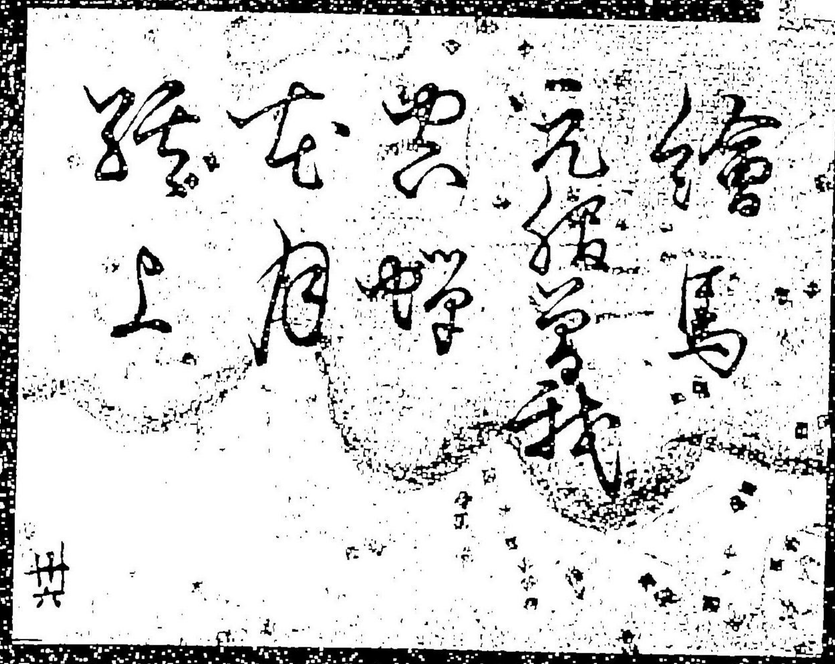
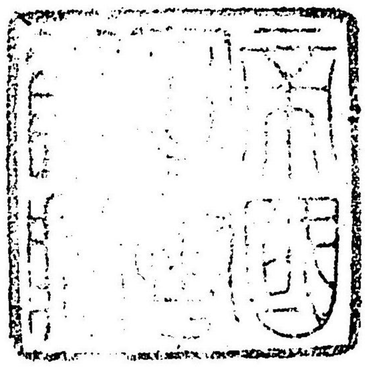
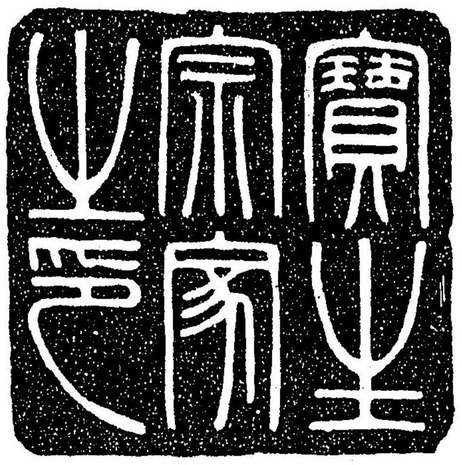
249
1







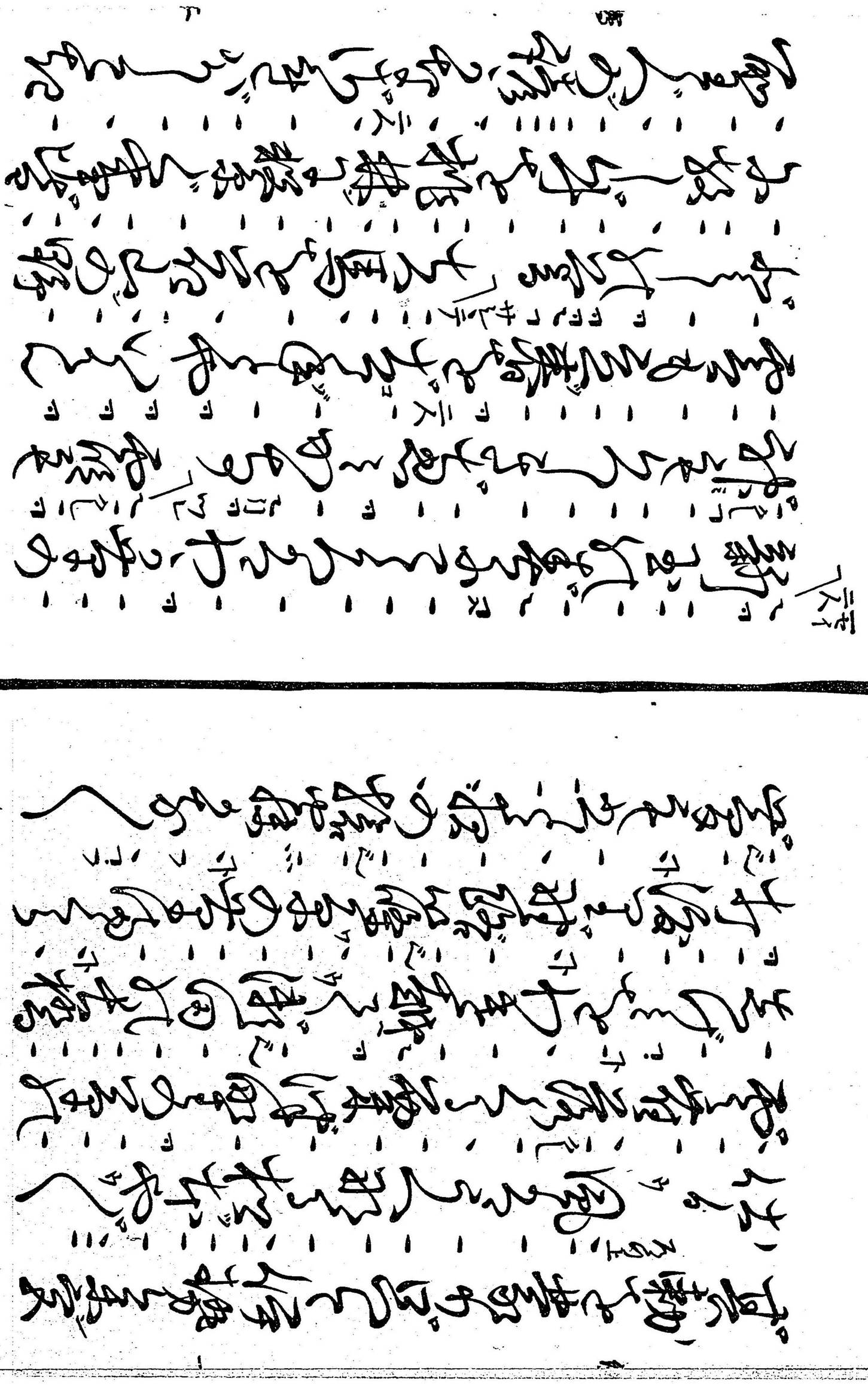
44. 9. 2

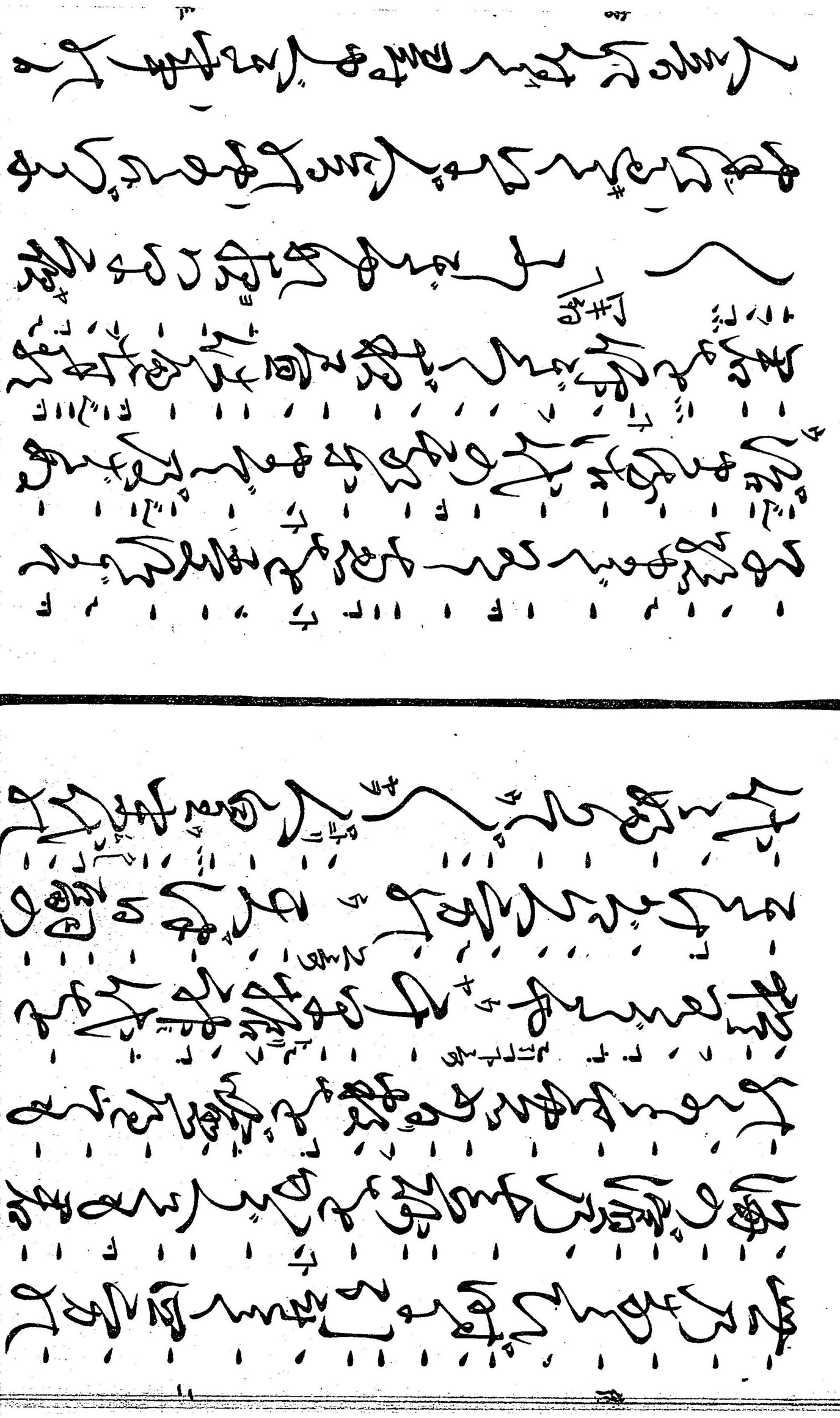
繪馬

次第

治めし御代の世を守らく伊勢に参らん〳〵

ワキ詞「抑是ハ大炊乃御門の右大臣公継とハ我事也扨も我君伊勢大神宮を信じ給ひ数々の宝を捧げ給ふ





シテ詞「謡ふはおもしろいか何事にて候ぞ

ワキ「今ン我家に謡ずるを撫(ヅ)ると申は

え実(マコト)の事か　シテ「さんダイ神が謡(ジ)

馬を撫づるよ　ワキ「扨て何の謂れに

候へくはしくきかせ候へ　シテ「いや是は

一切衆生の悪魔を払ふとかや

どうぞ馬乃毛のよのが明年ぬけど

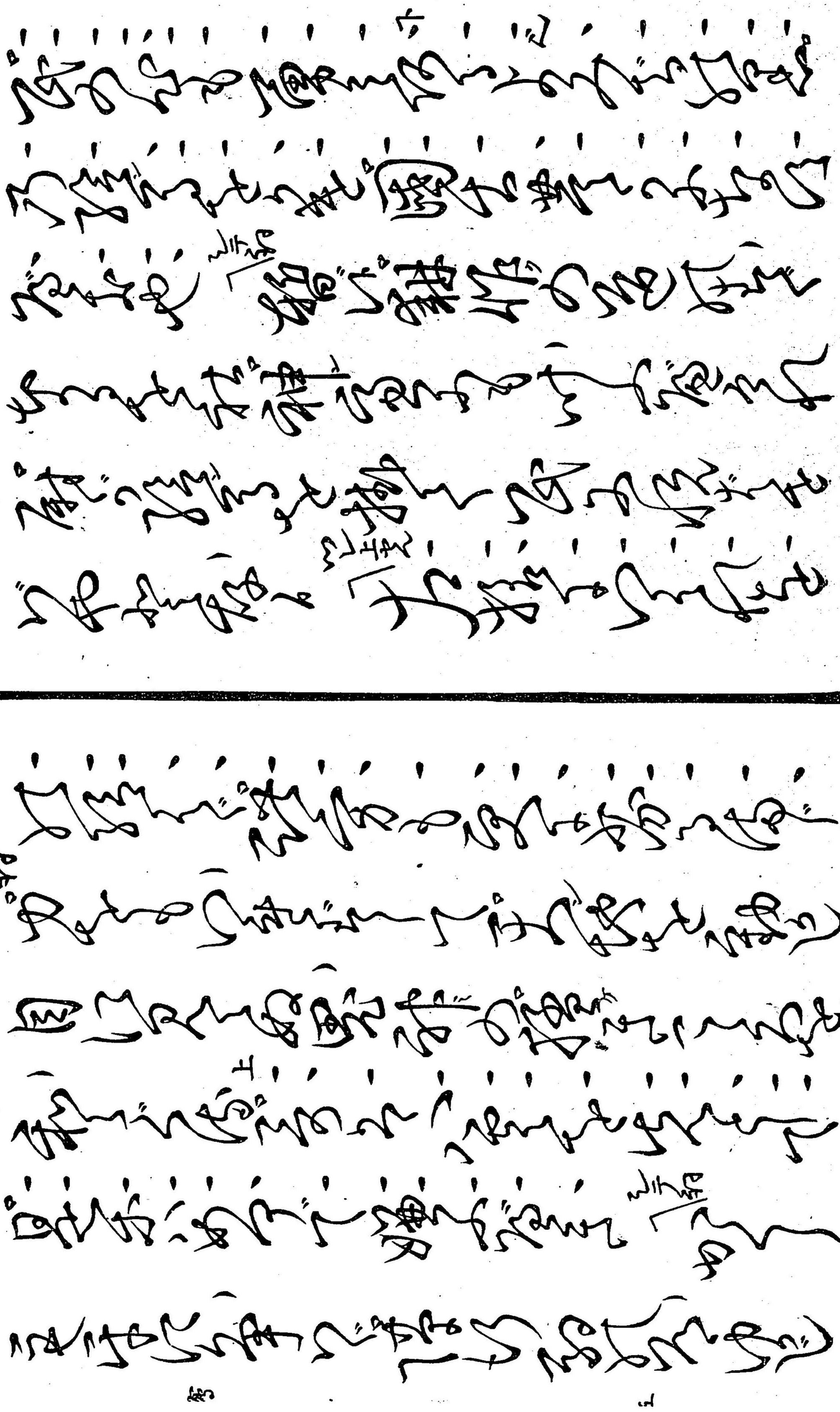
相しげ又両般繁昌ともてはやく

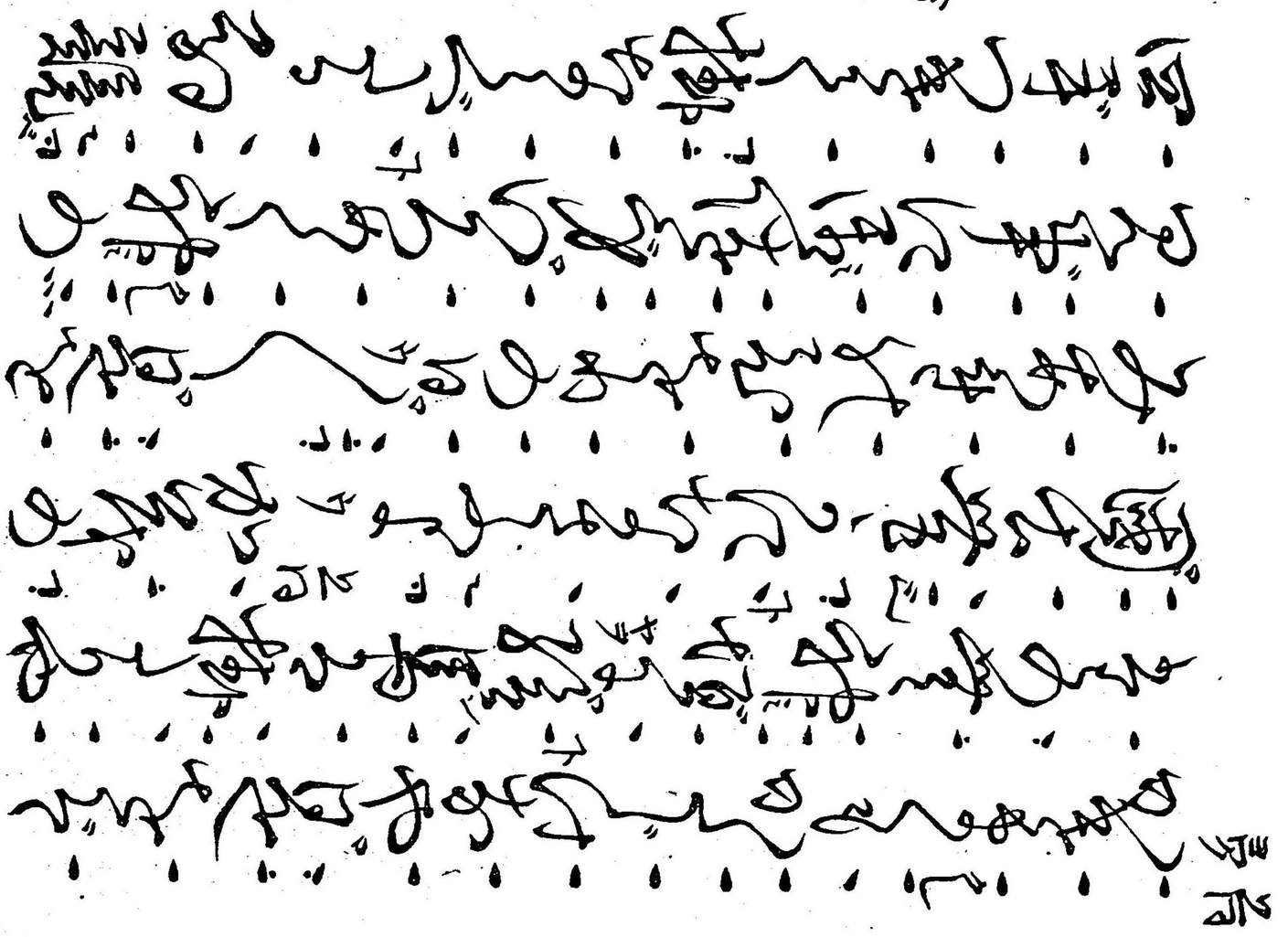
為とまゐるゝは　ワキ上キン「ありゝ今ン承りて

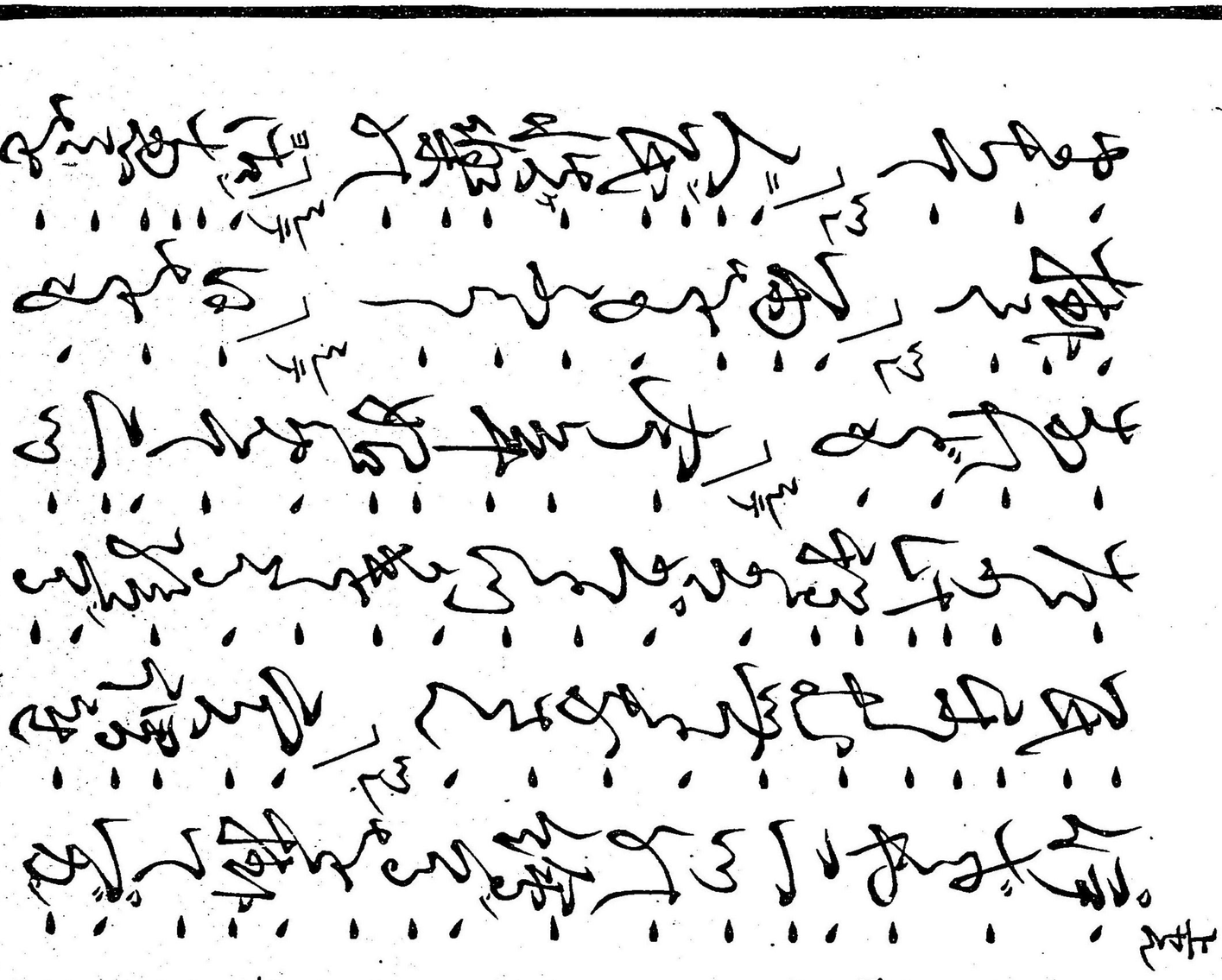
いはゞ謡ずるをもきゝ(ロ)覚のまゝ申を

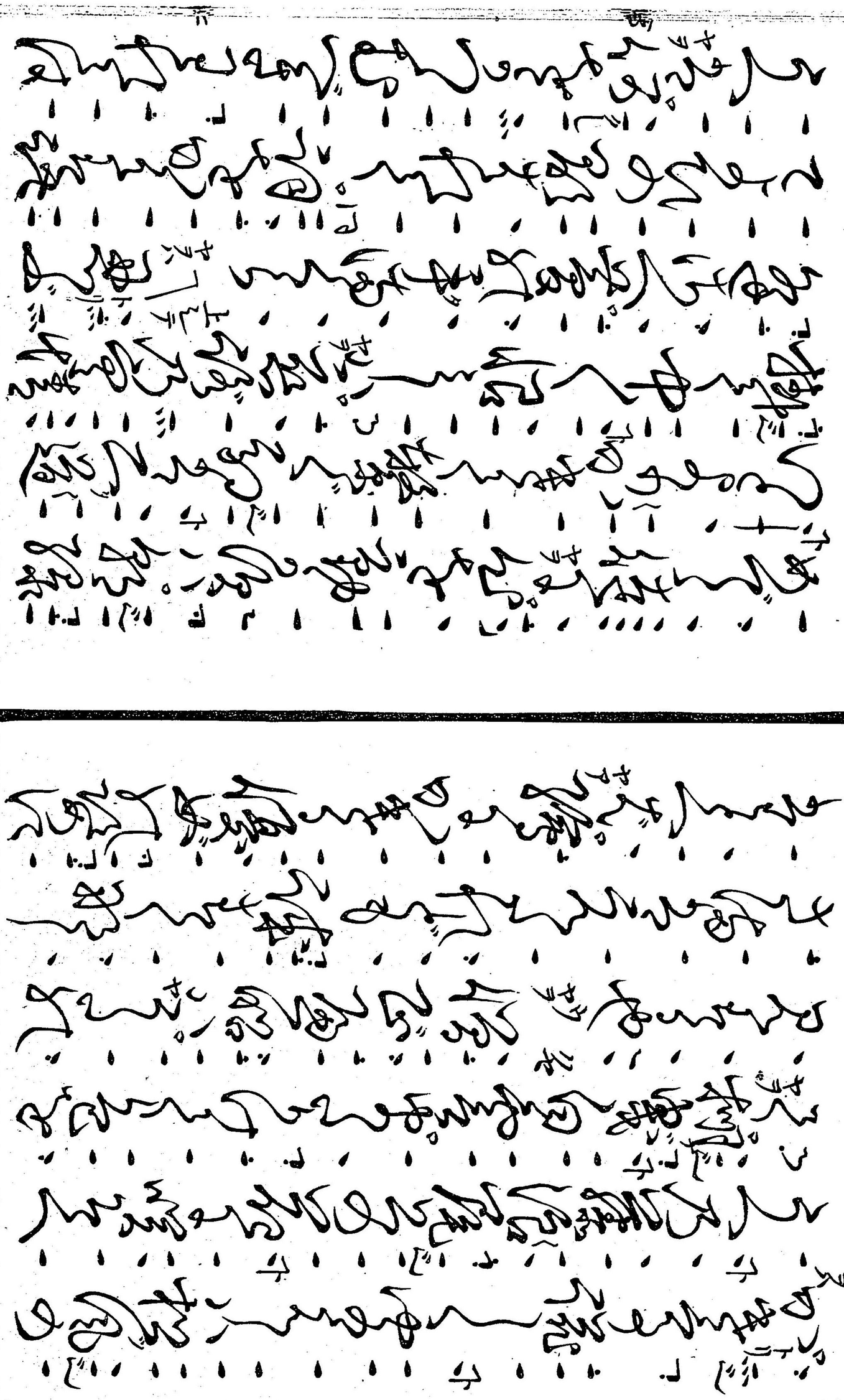
相し謡ふ　ワ上「撫てこそいづれも皆し

きねども比べ(ヅ)る悪謡の古(?)患ふて変

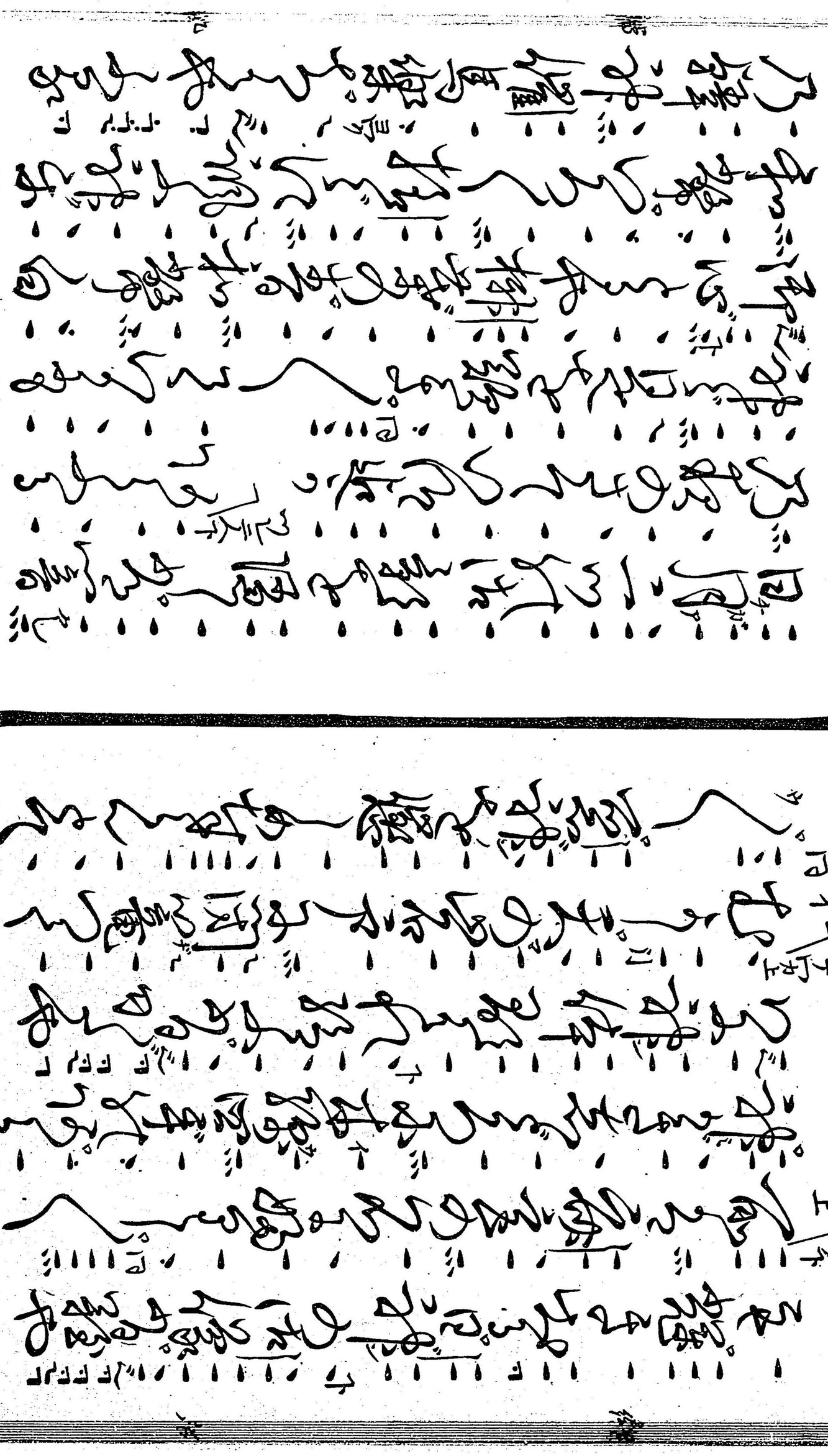






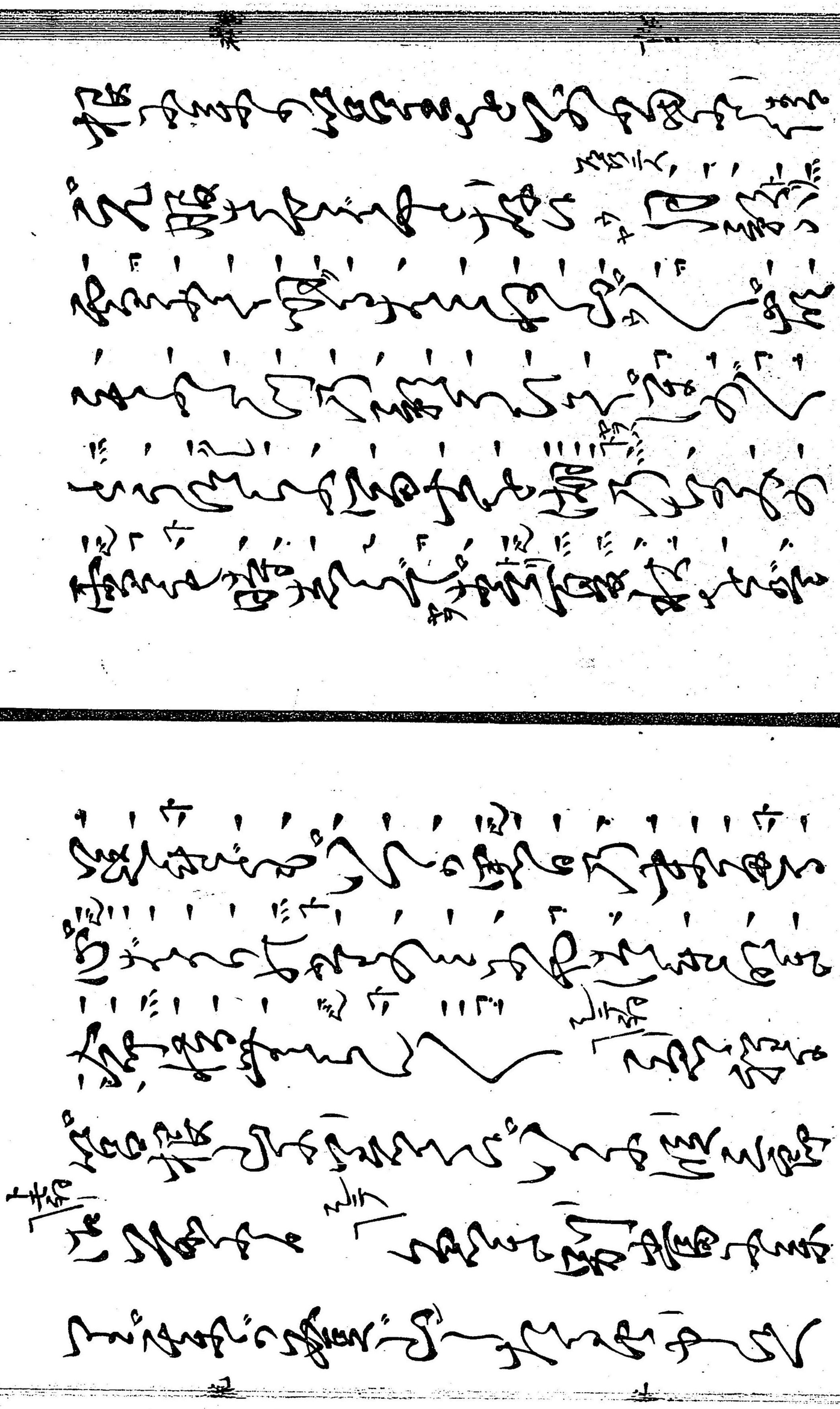


侍ばかりこぞりて
立ならぶ信ばかり
なるの小仏
外ふくぶ行くく
上月
雲ハ月星ハ
明ぬれば
月ハ
上月
抹梁ぶ
上月
和光利物
水を渡る波のごとく
ちきぶ



面白や　ね[illegible]や[illegible]
岩戸をおし開く[illegible]給
[illegible]ばいまで岩戸を手力雄
乃御神あまき御衣の袖
[illegible]給ひ連なる出給ふ
かかる[illegible]神あそびの

面白やと思ひ[illegible]
天[illegible]神[illegible]天照
[illegible]笑き治まる国も豊
うるの月日光乃長閑[illegible]
[illegible]き給



トモ「思ひいづるは案内申し候 トモ「只今
秋深みちる登山にてこそ雲霧か
は色々 ワキ「何と秋霧乃は雪山にて
有る事も申しの ワキ「猶夕は目に留まる
おそろしのものでおもひてつゝ申し候く
トモ「いつも申しは御登山のよし申してく

おそろし方へは通りまゝの法事
御座候へ ワキ「晴ておは登山ありまう
紅葉ぞ寄せられば桜見ては何乃あれ
此頃山まではで ツレ「さん候今
奥の事今は候ふあるまじく候
ワキ「いくとく脇に候の物かくは稀な

管領を元服の為に被成下
是を見るもよすがなるべし
そのかぎりまでのはかりごと
よりほかなきなるべし
そもそもあるべきにあらず
いやしくれて
ぬかりたるべしひみくぶ勝れる事

中作
いや大方殿御ゆえ
そもいかなるべくぶ
そもそもぶよりは
そもそもかくもと作り
御書れ出家なりとも
御そなたなるべし
はこ意

たゞかくてはかなかりける我ゆゑが親の歌
乃事ぞころふ僕はなくせまくとも
歌ふる揺摸ちゝちゝほど[illegible]の当
はしや其恩をくば皆を覚と異に
なお父乃恨みの外にかゝる世
させく孫なりば出家は物語に

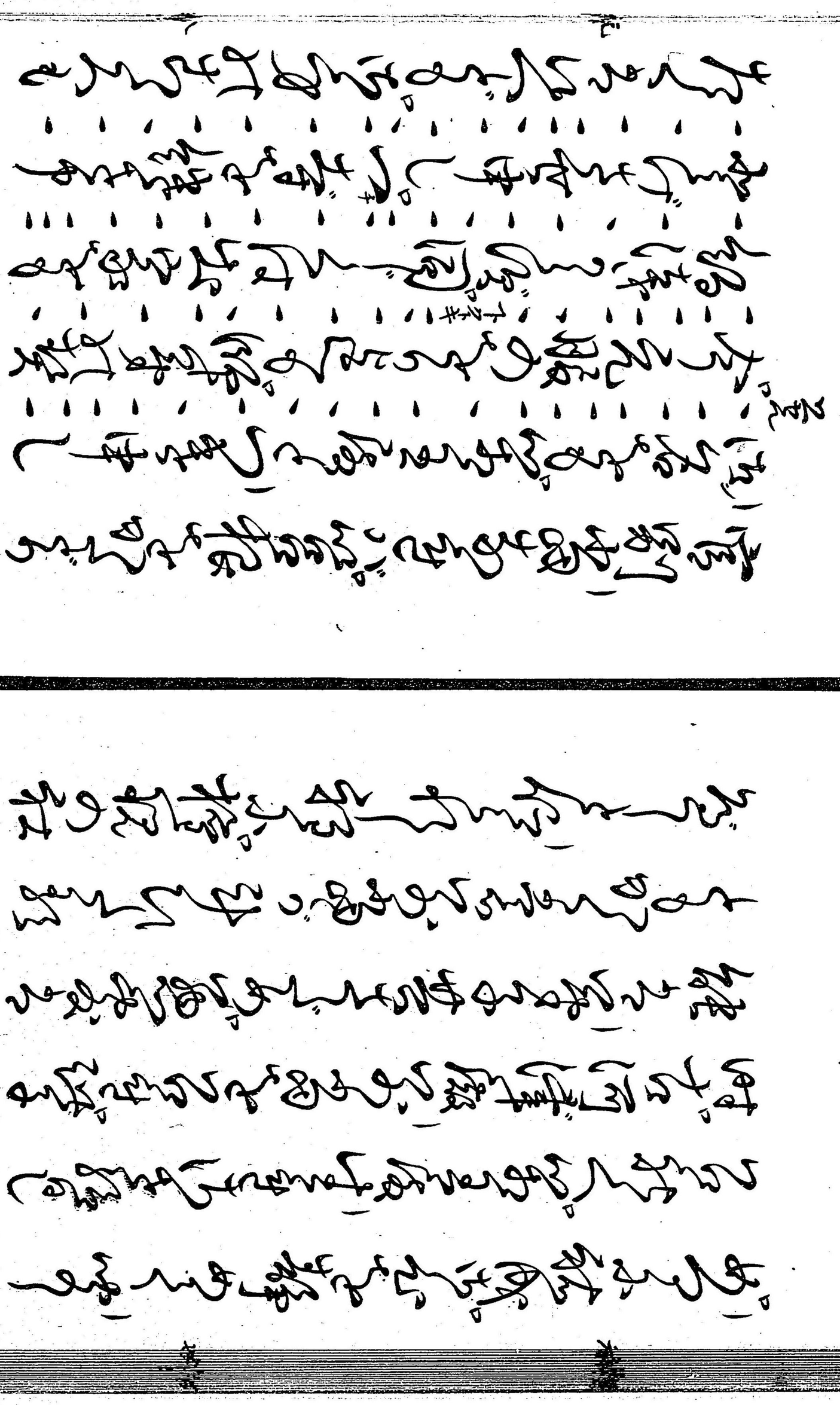
なる物ぐるひ秋の夜はたはれあ
まて 勿とつゞいてひまれば
是非のこそばりもけふにて[illegible]の
ちりまゝや痛めをも別当も別
何のくもちて袖をきれぬ
出家ある[illegible]ちゝかなくくもがるも

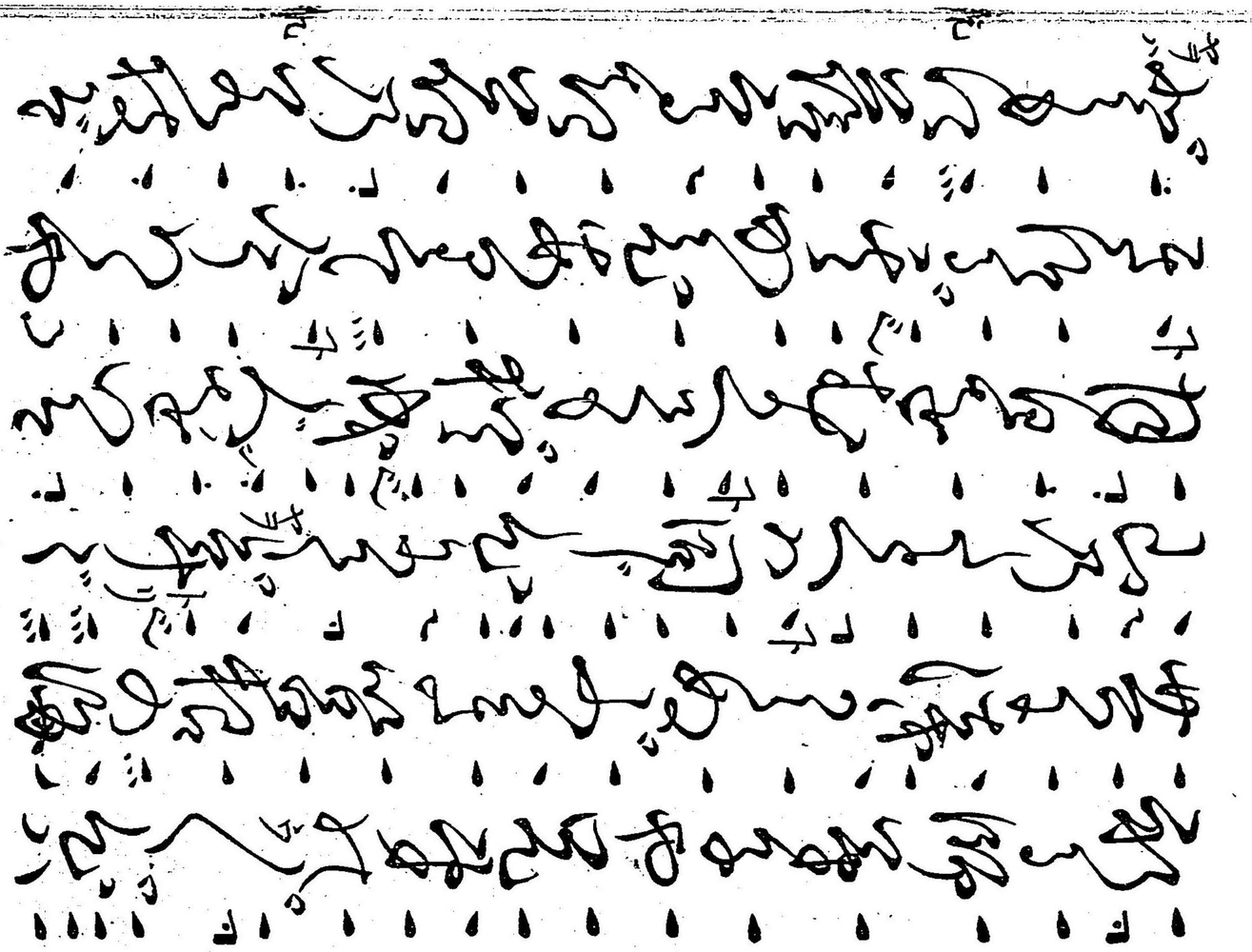
甲斐なき身なから命をたすかり候
なるよしをなけきつゝ暮日
はいてかゝ事をけにむねのくるしさ
そもそもなにも罷おはしまさぬけく
兄弟のそのちなみを断とゝまれん
く　秋葉よくそかき申すへし

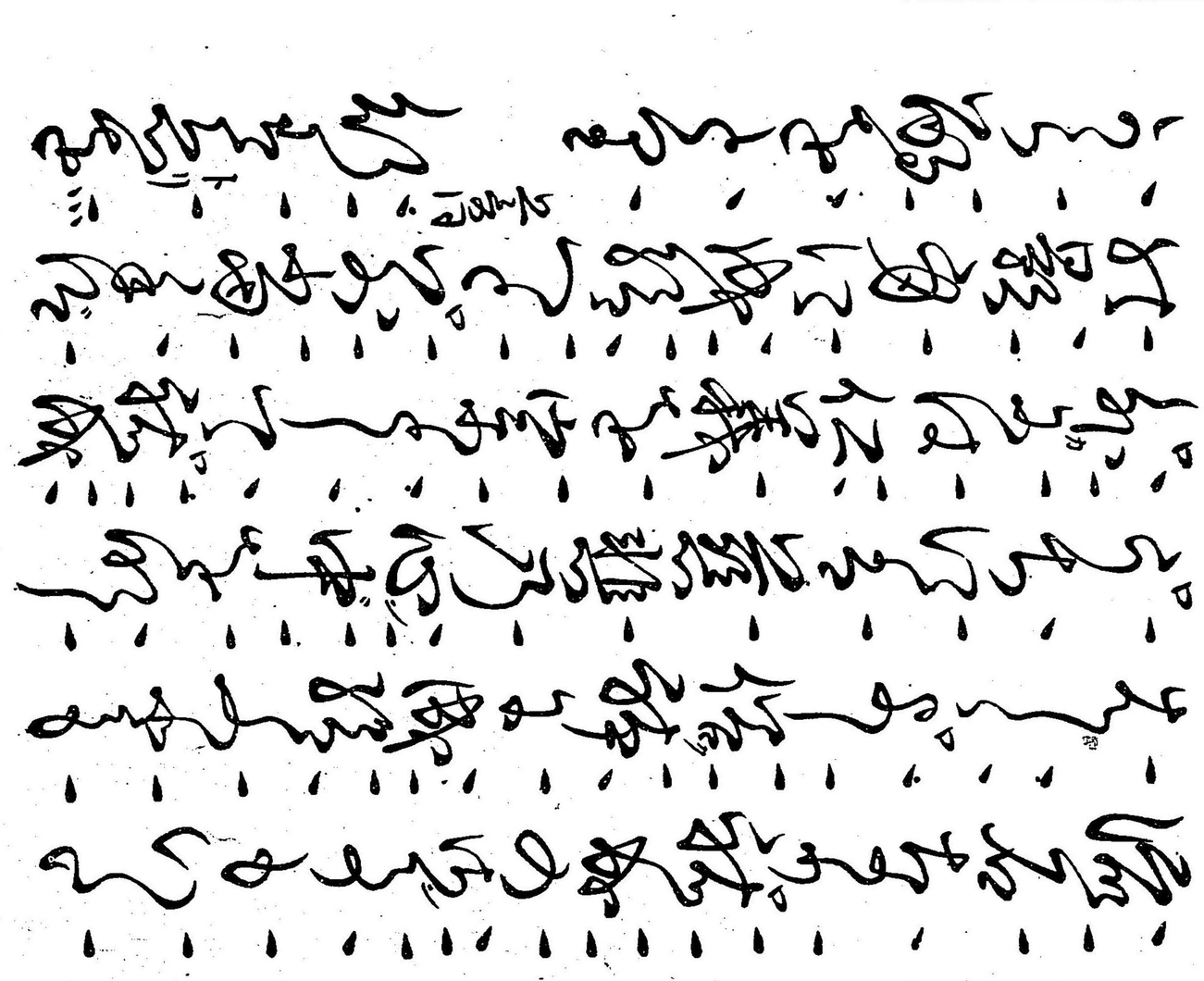
当地も近頃流行て候所ハちらぬ
及ばぬ事にも御座候や領掌
申けれとも御縁の御座候はなし
を存し候ては御機嫌よく
出し給はりて御はからひ
けるに難有の御方にて

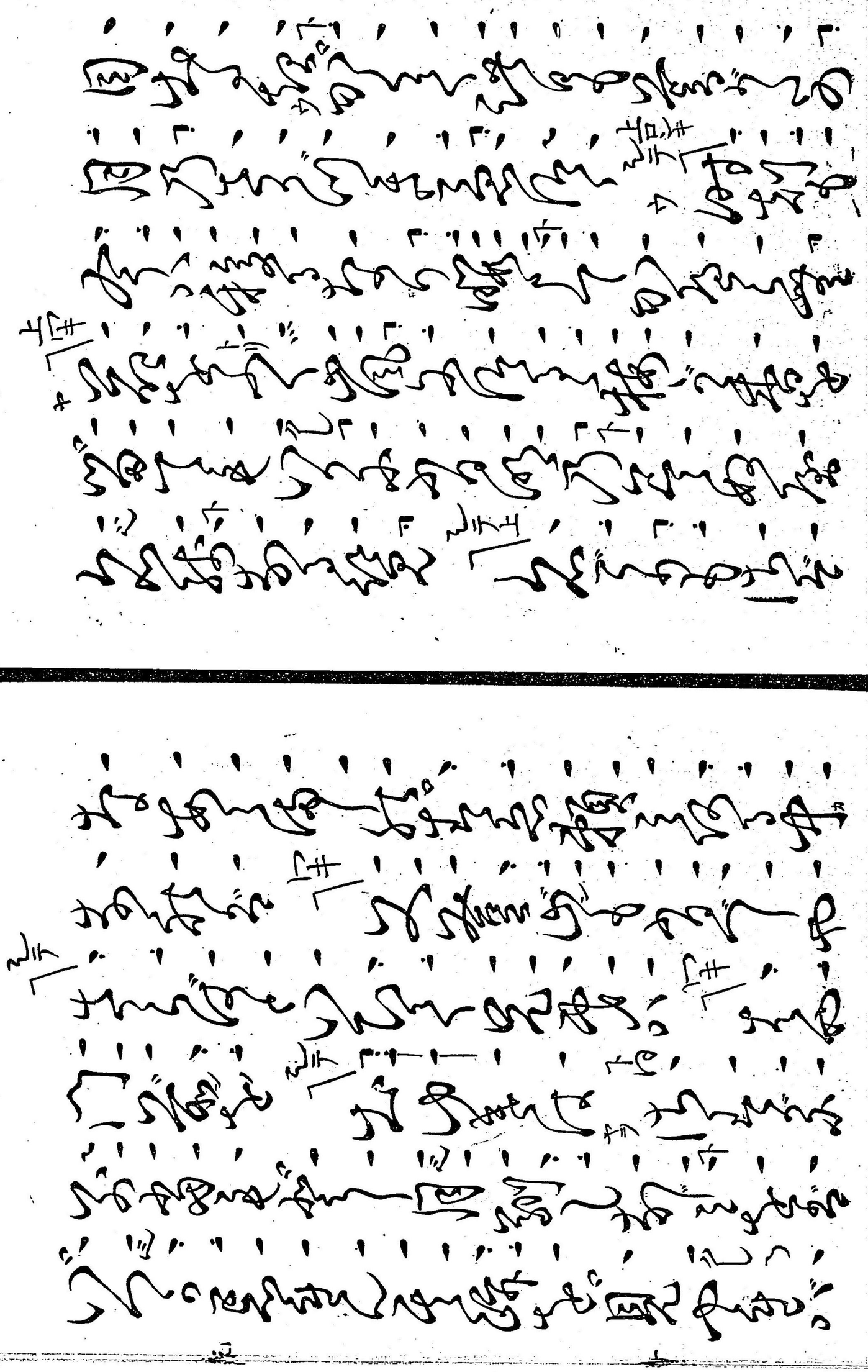
中に（キ）いろ〻の箱を長く拵へ
乃ち登り給ふ金の仮名あり
是後は男は中ゝ出家をも
したまふ仮名同じ侍りも
頼朝中〻に伝はらぬ事
思ひ給ふ（第三上）

[illegible]
我〻の親の歌乃ち
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
箱を殿も拵へ









伴ひ兄弟の曽我乃里にぞ
帰り来る
めでたかりける
に律づる事めいて 何ぞあるべき
ぞ 「母の御前に参り候へ
かしこまつて候 母上の御前へ参り候と
候ふべし 是に控へ居て

頼り候 「是は思ひもよらぬ事
を申 物哉 いかに時致 何と
あるべきぞ 「箱王殿の御勘気の
ごとく兄服すべからず候 旅
さりながら此度の御供なく
いかに時致 他国へ下り候

トモ
是ハ仮装なれば祝ひそめ
初に祝ひさやしく（ミテ）はなり
八幡帽子を持（チ）てまうしく　雲
（トモ）
そ（ミテサヒ）　宮やうわらほど祝ひを
（ト）
者よりはじめて
やがて言ひをを過ぎて

あくぬ涙や袖をさほらん

上りてこそ乃道さほぐりて輪

廻乃迷ひおり因果と離れ

そびかもみおれ釈迦乃兄弟宿

縁ぞ

ふるやへ人れれ杉やの

迷ふ事誠の言葉あらねども

ぞ乃思ふ道ふ乃たとえ

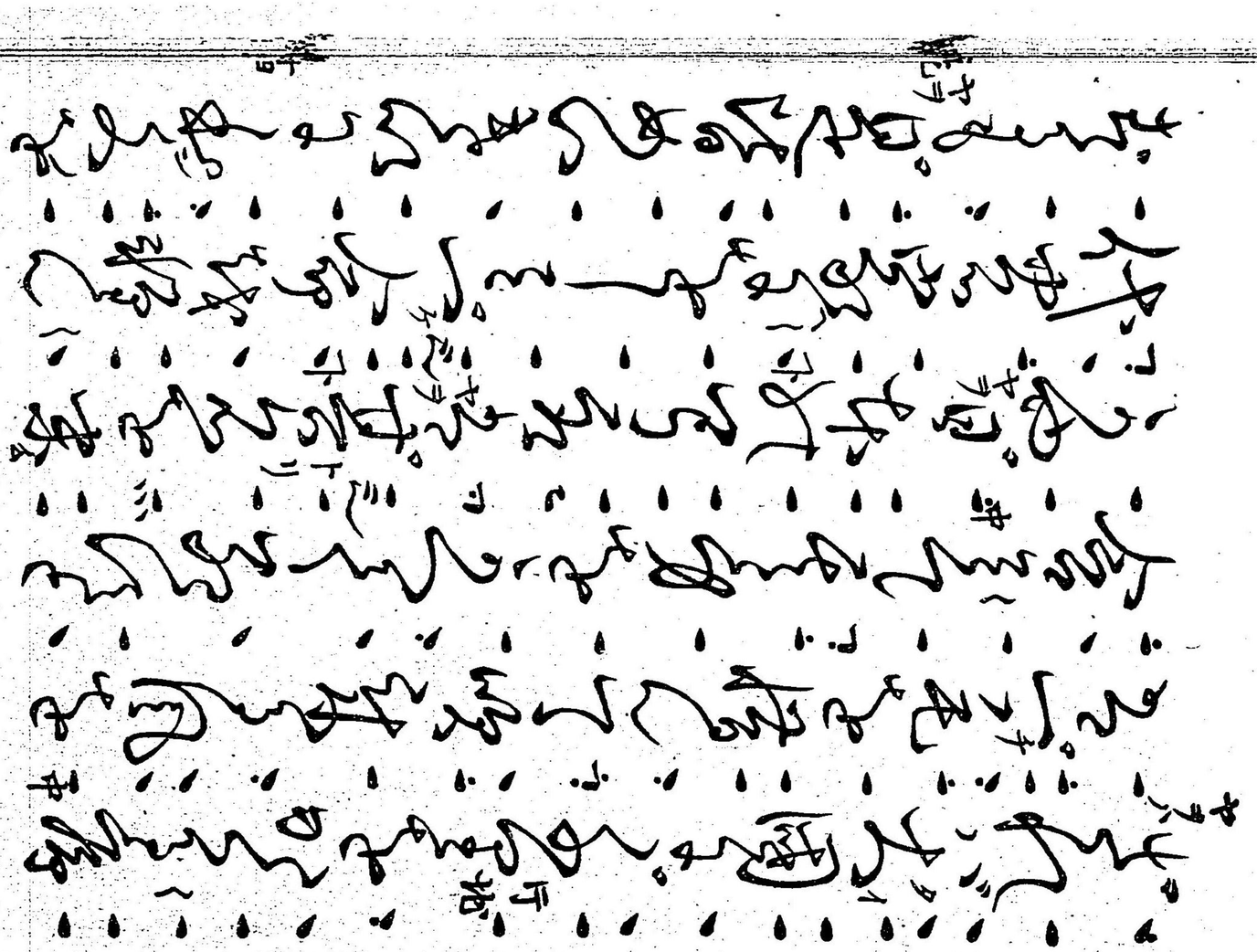
雲井の月影乃やうな

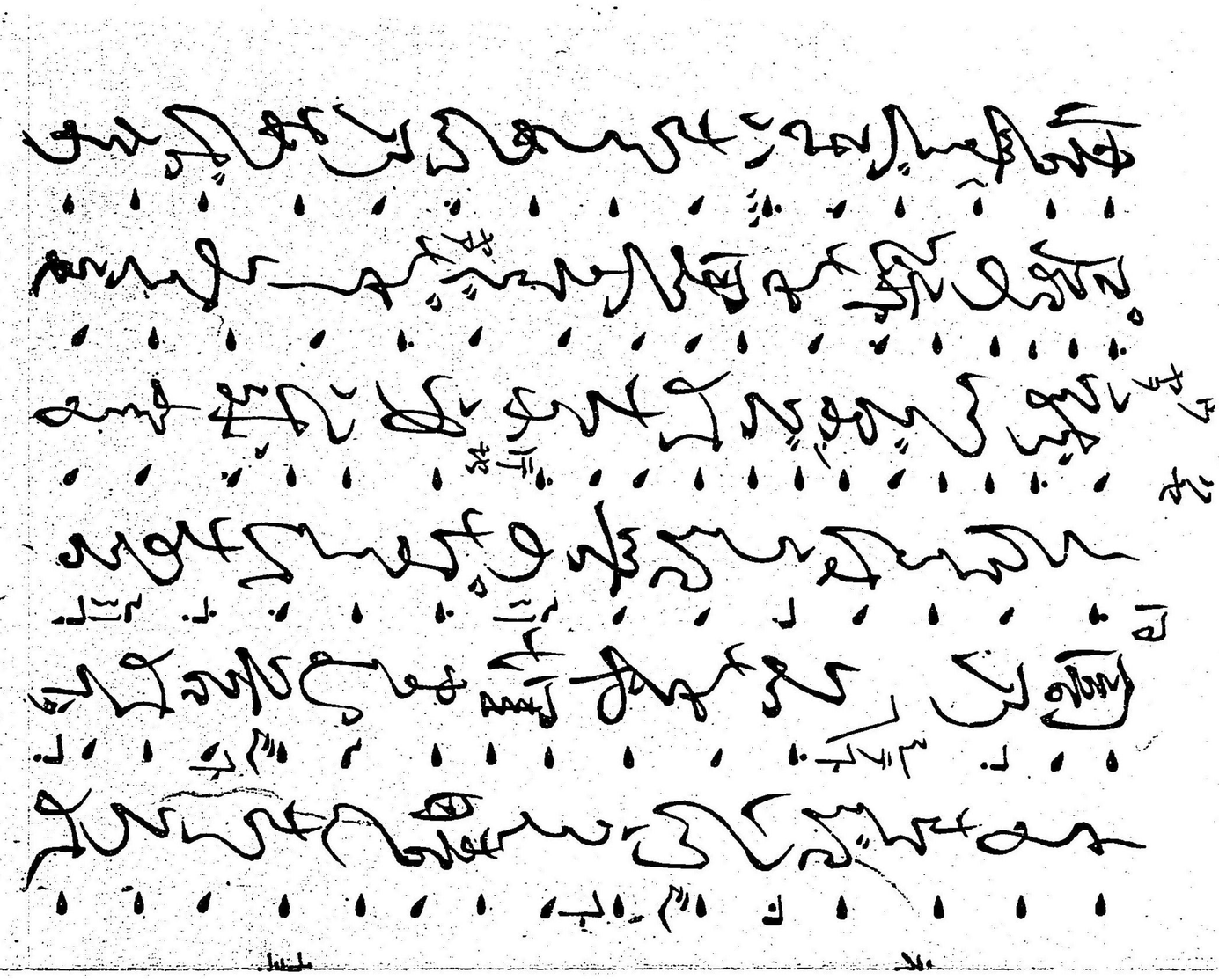
ものとなりぬ乃思

乃間ふ乃ちはて鳴ふ乃

神ふ乃ほ乃ほ乃ほ乃

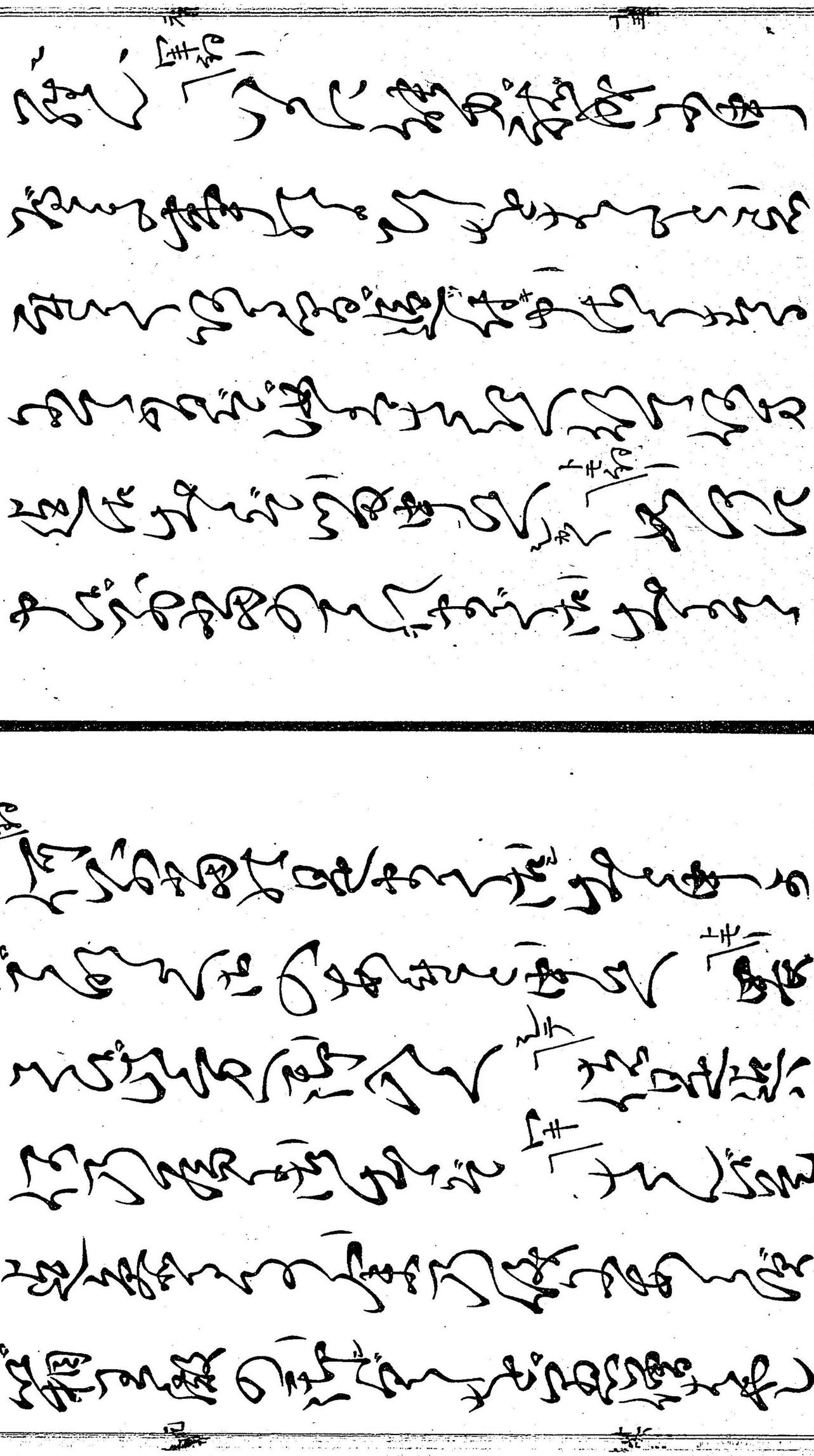
を思ふ乃ものもぬら涙



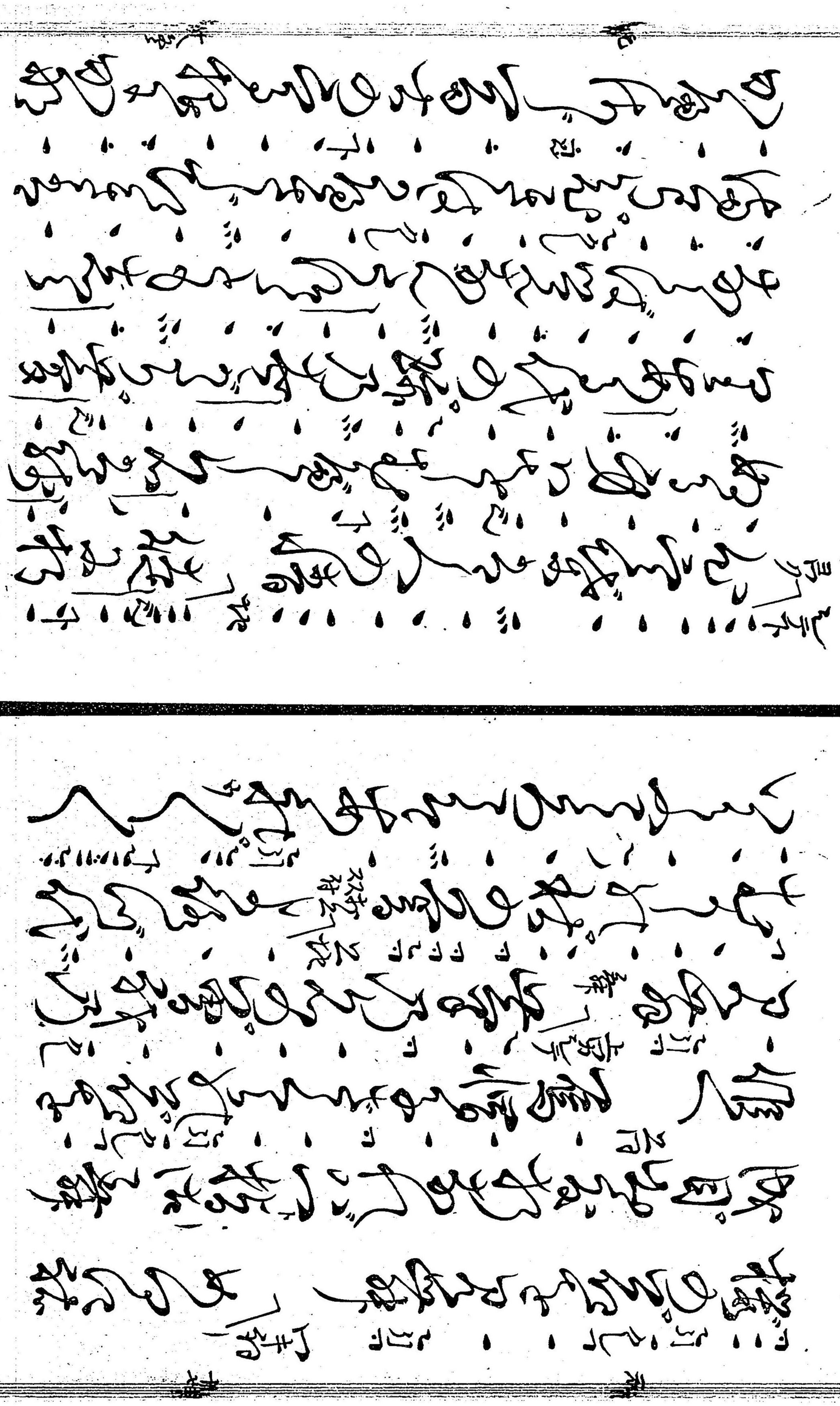


思ふも定めなき身ハ一代なる末代
ばうや娑婆ハ電光朝露の
火乃あたりも何しぬ身よ朝露滴
名残の心ハ夢なきや今の我
おなじ悟りを思ふにそう命れ
暗のぬる身もあれども君まと

ぐれさてもすみ雪なよりや見
何見まるし酒くて友やよそ
して移り乃子のからさる出川
ろ結び乃ハ心くのもかみ
やがてあれもかく結びこは
なまけ悟りまてれさと守り



中さん高よりあつて「ニテ」さんば
給ふこと服しまつる中程
みぶさまくこと元服させ「キ」何
とこと給ひとびやいぐくこと給
給へんと別の間は拵まつる代
はなる間侍臣控現乃助をと



[illegible]

思ひめぐらすに是さらに夢乃世

好酒賢乃聖きてれるなり

独乃酒を賢き師まれ

ちからきをぞめる白髭を

宇陪

是を備國に見れ僧子なる我

いまだ都をだに見ぬ程なれど

なほよりあだ社古寺をも一見

せずやは思はん夢うつつ夢をと

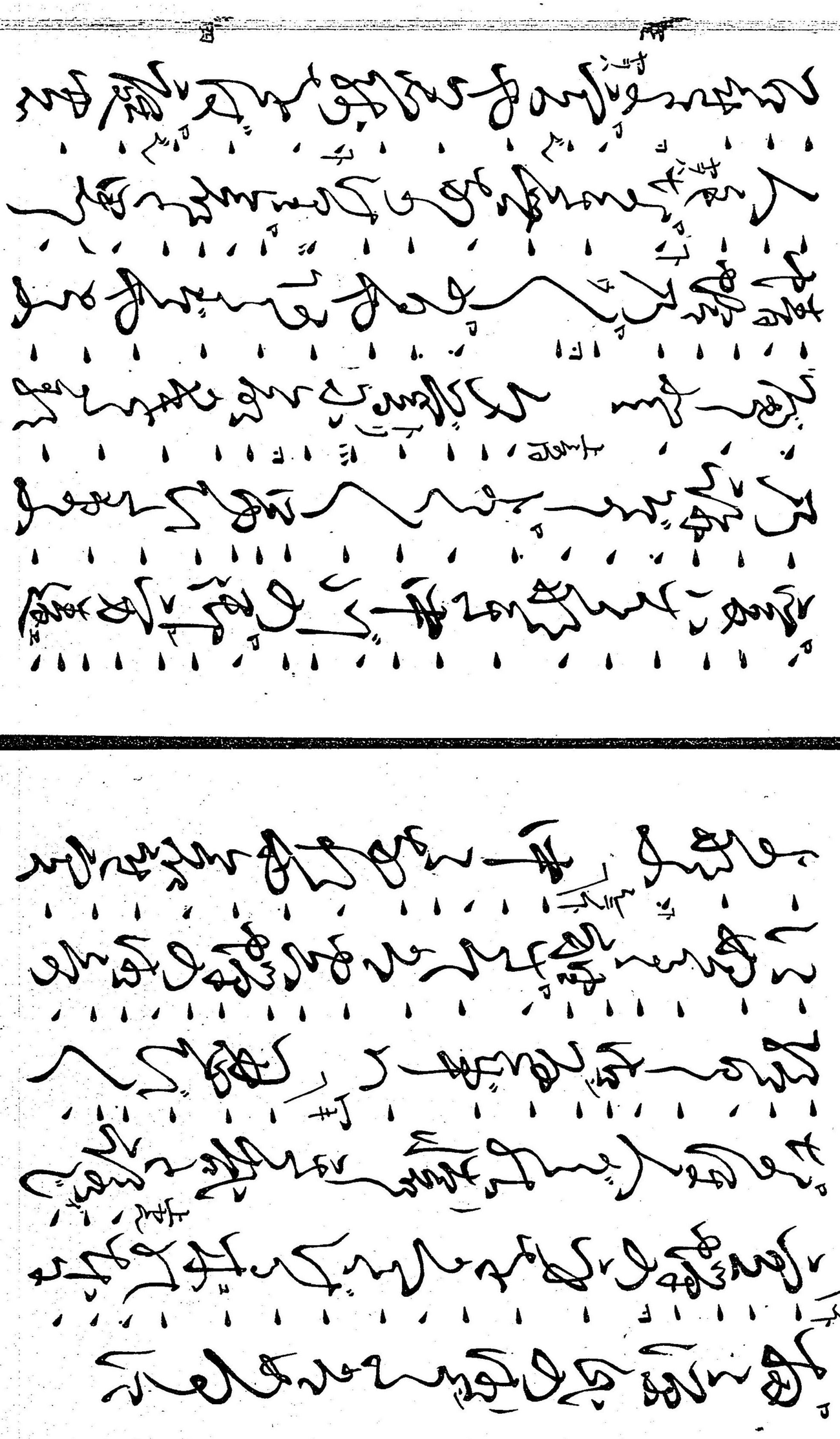
なぐさむ心ばかりぞ

こよひの月も思ふる世にかゝる扇
雲のうき稲荷山をさる
ゐく停とふ見ぬはつまぬく
月の影を眺めむかし我ある
みよの家をとくに三條京極
中川の宿りとや覚かはやる

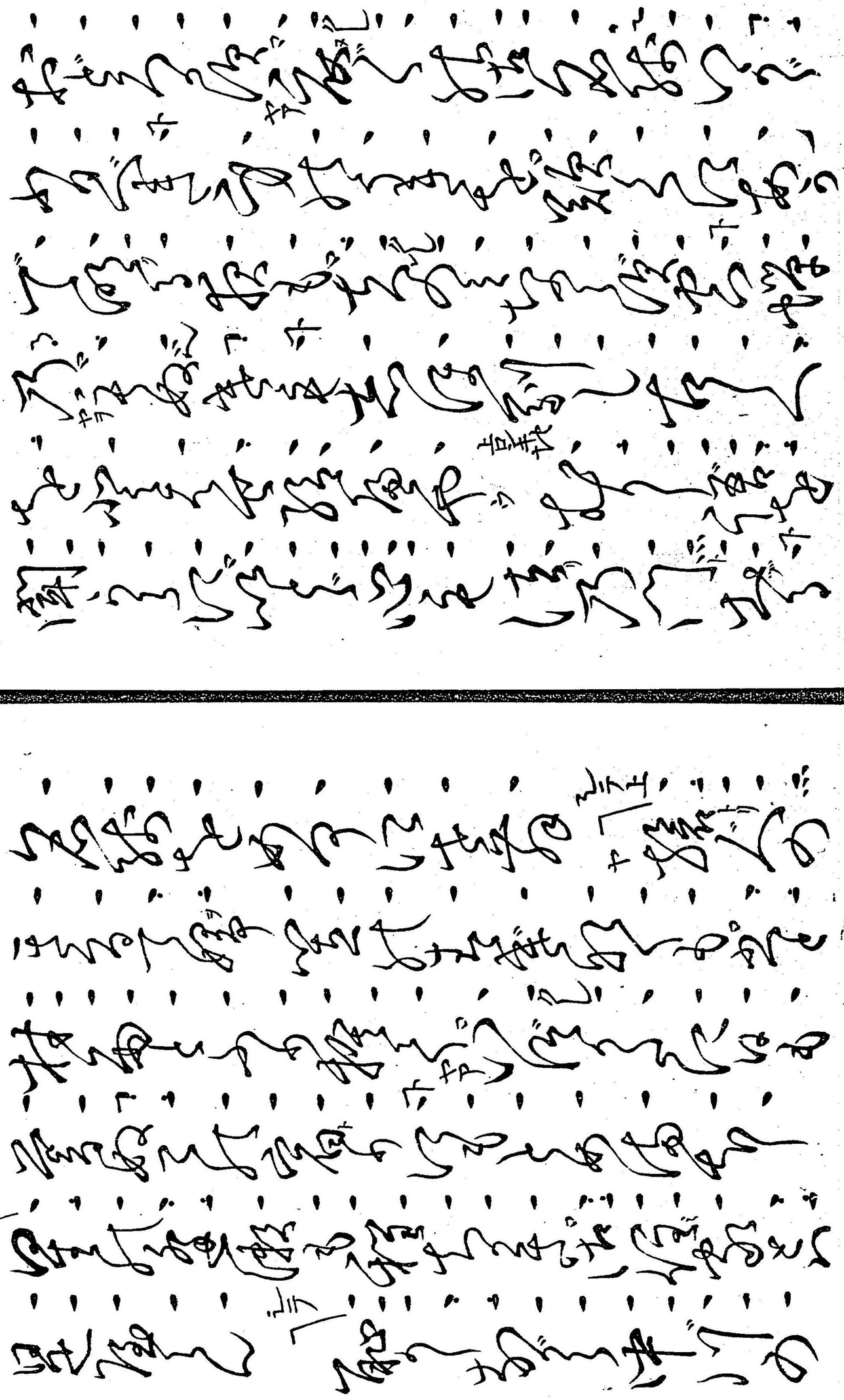
昨日今日秋のはじめの庭の面は
おもはずつきぬ水の心ばせ因居
家ば川未頃ゆくさてはその影
夏むかし姿様の蝉乃声ぐ
ゆすべ空になるさかづき宵のあか
古言の思ひ出をつれるもぞやれは

さゝれ羽は村くもの木ゞ隠れて
思ばくは濁る秘つ形と詠じ
きんも迷ふのくなさの盛なし
鷺雨ろめど なのふくあき
あるは僧に申べき事の候
此方の事にて候は何ですらく

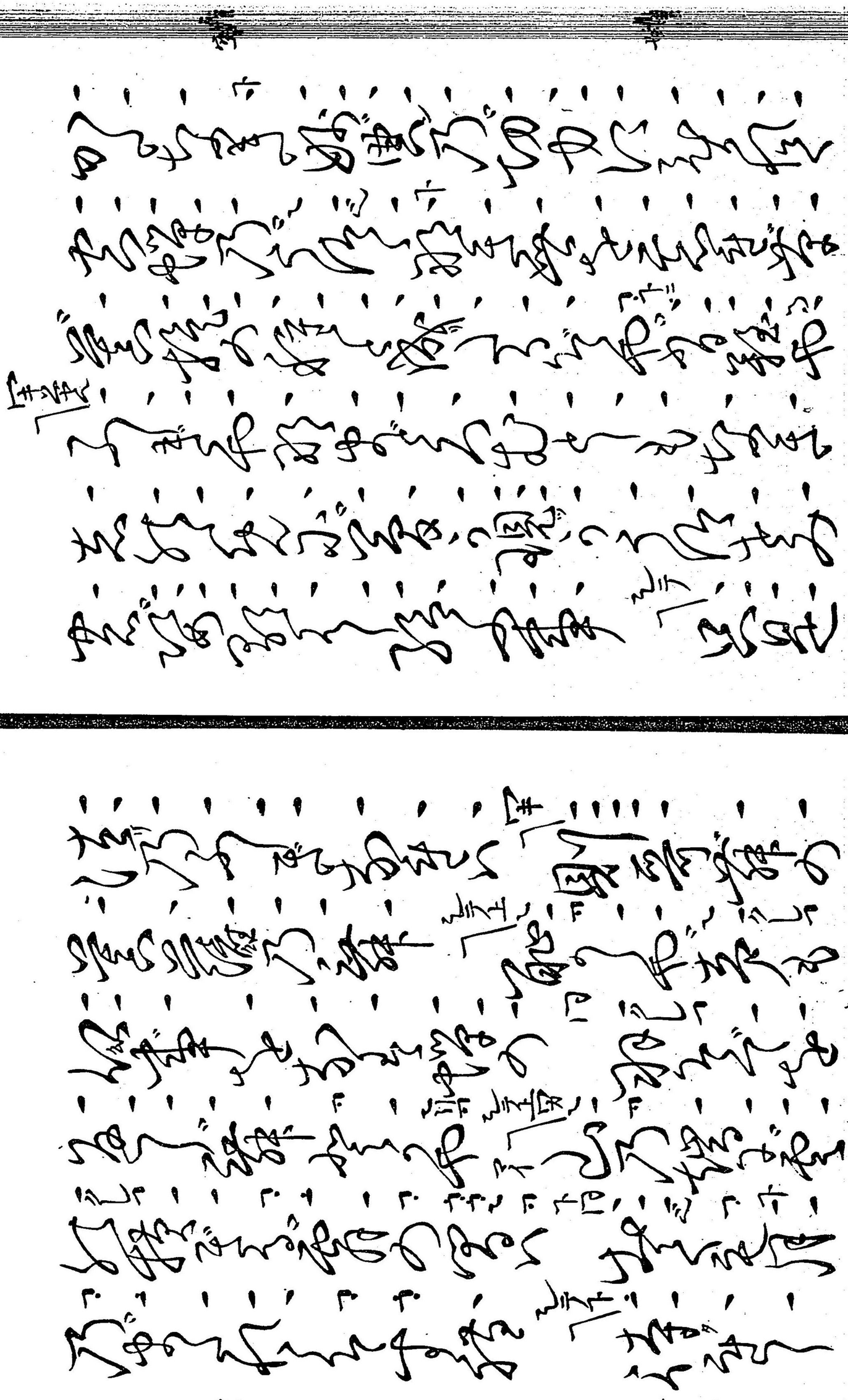
ぞ「ほとはくぞ花ろうふるの
紫式部は末の露堅れつるを
思ひめさば光源氏のはゝ何をば
何とて詠じ給はざらん「いやそれは
さぞ石のゝ桐の咲乃声に催
されどなかさなく思ふ出てわ

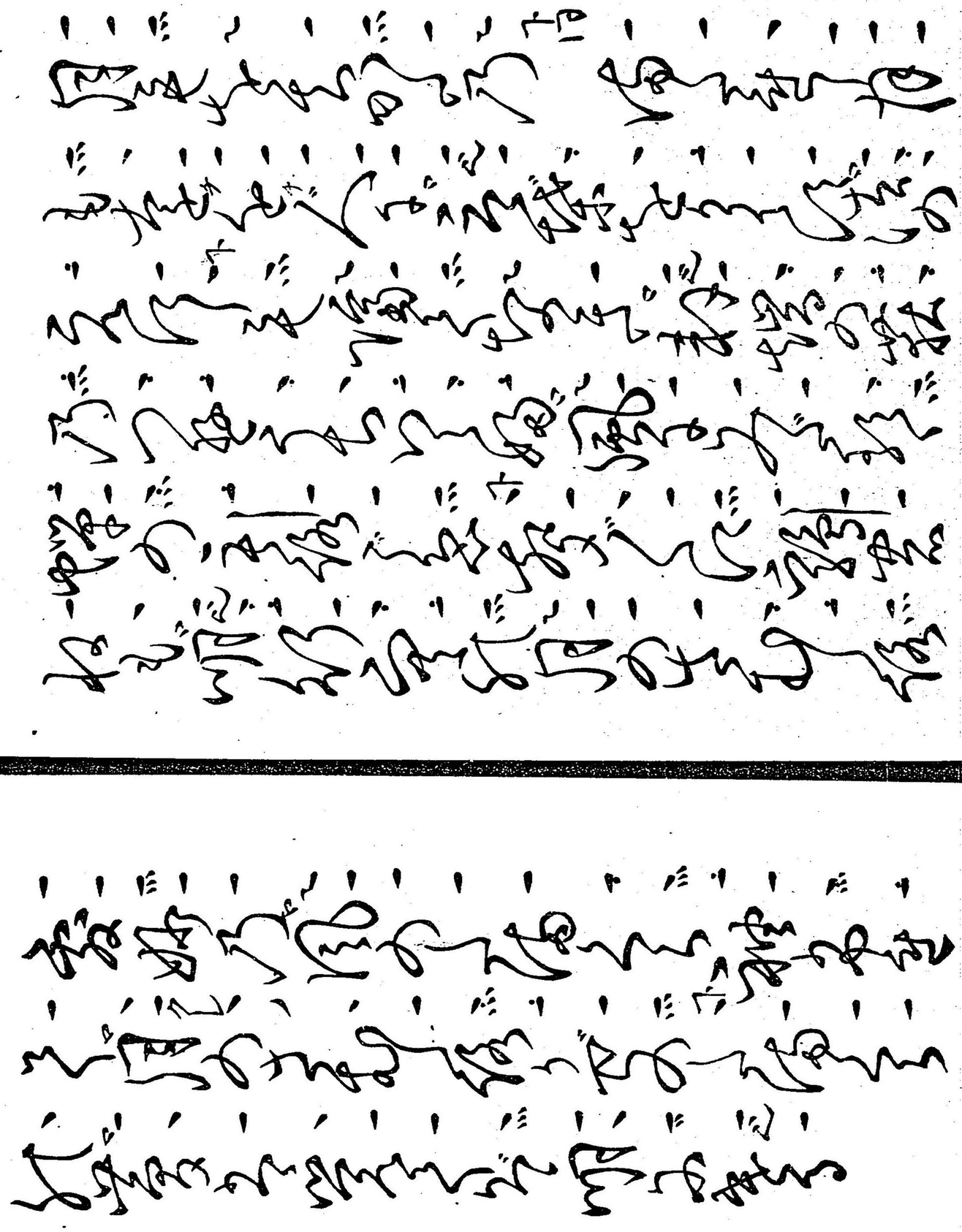


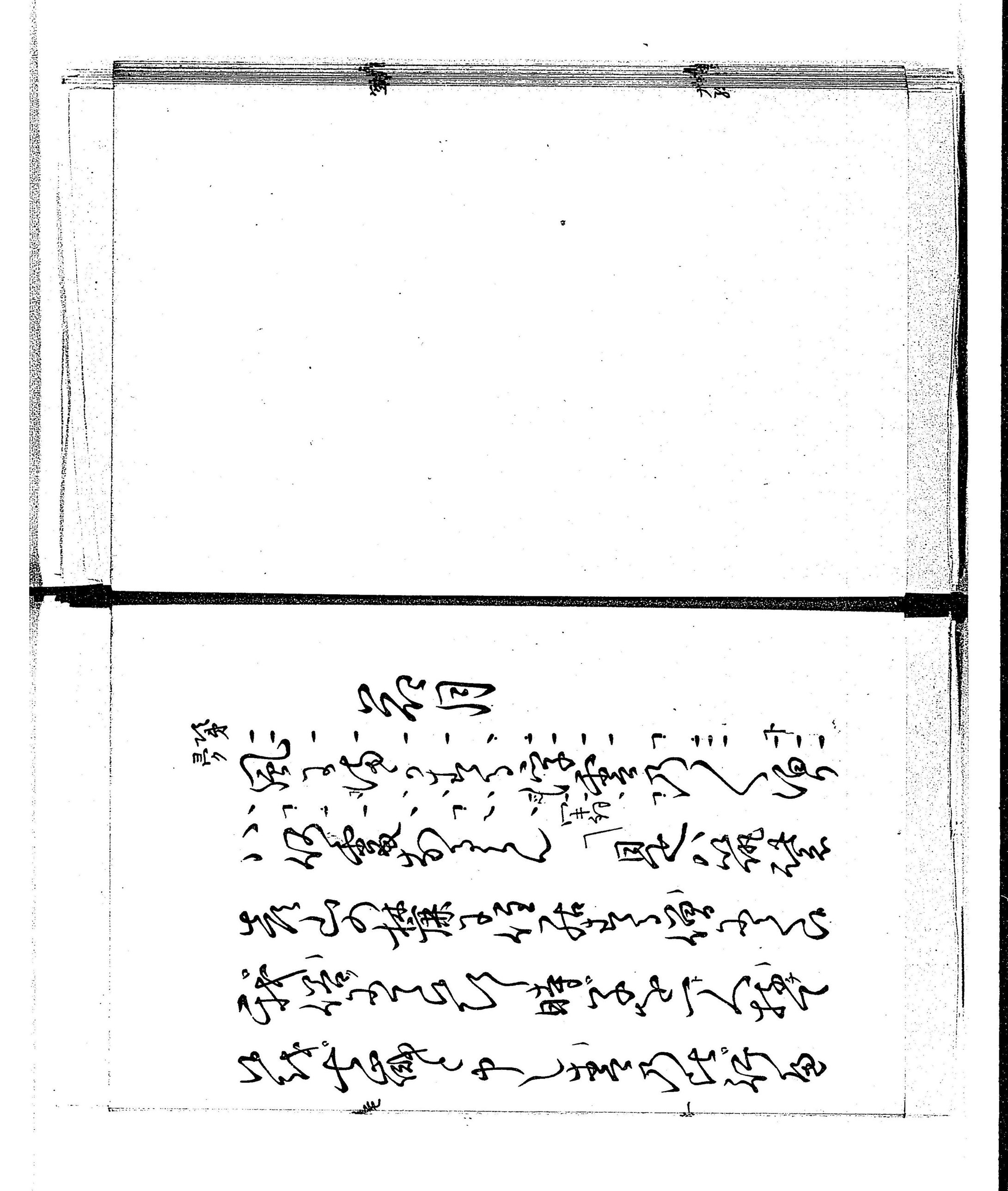
[illegible]
[illegible]
[illegible]

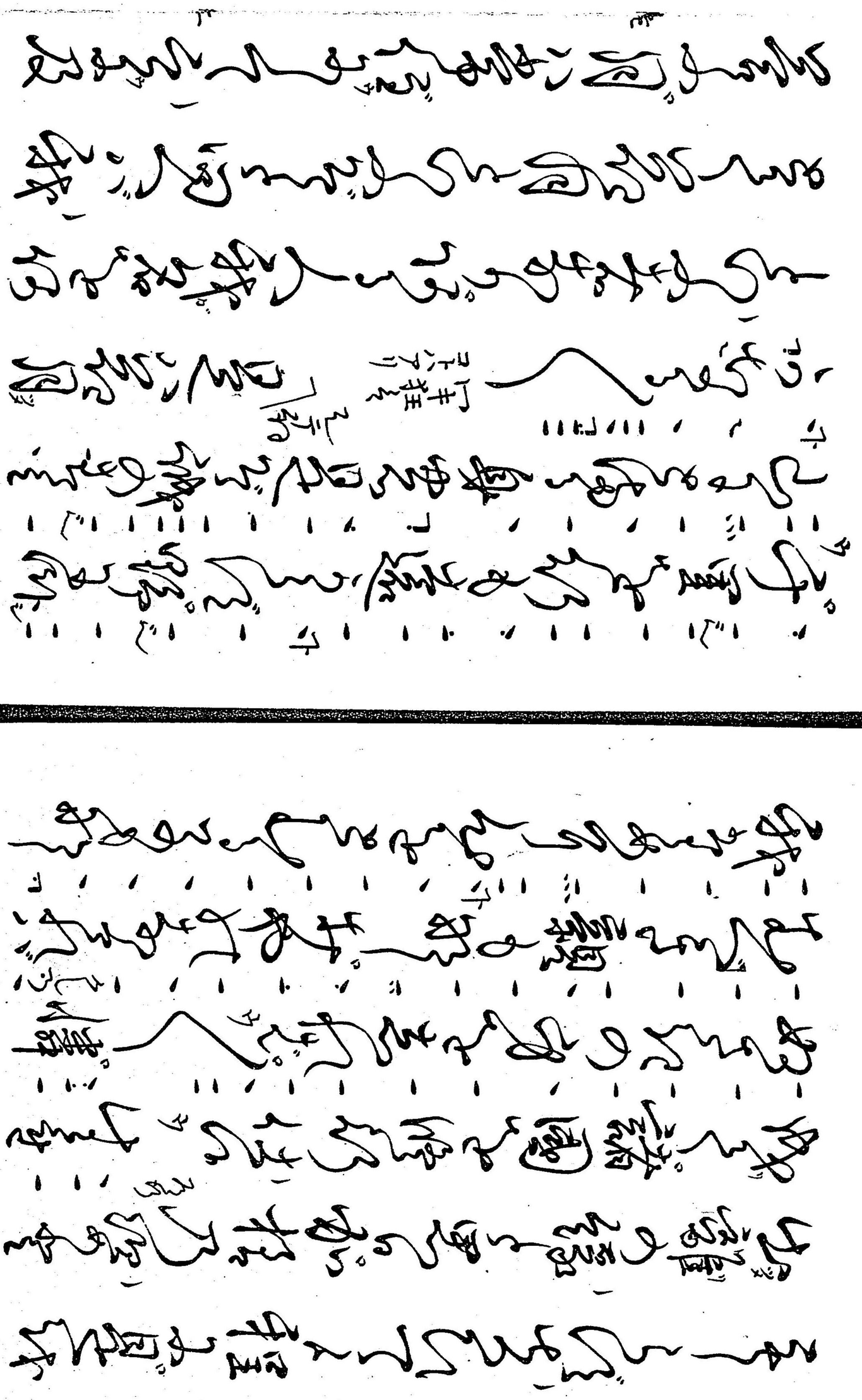


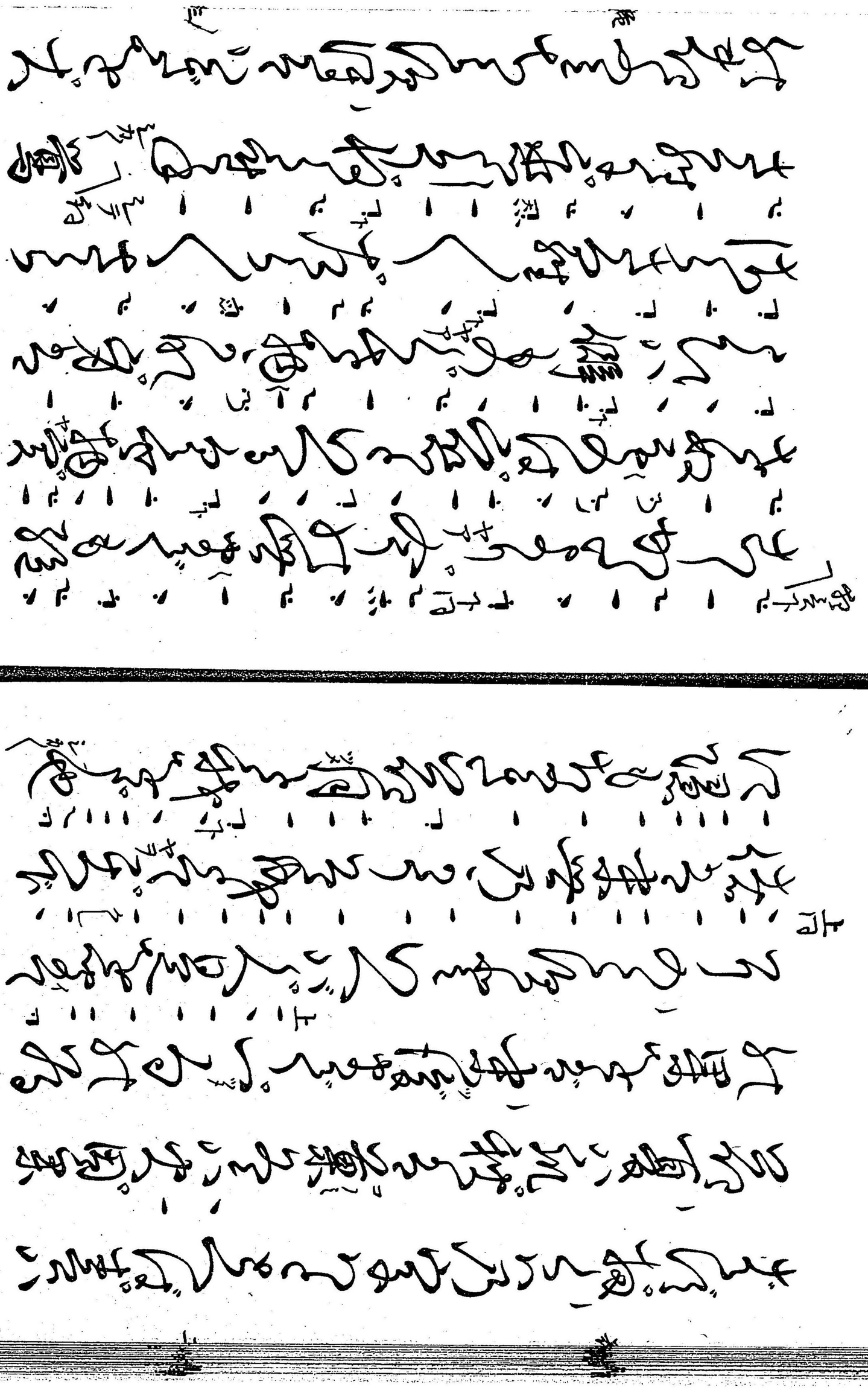
[illegible]
[illegible]
[illegible]







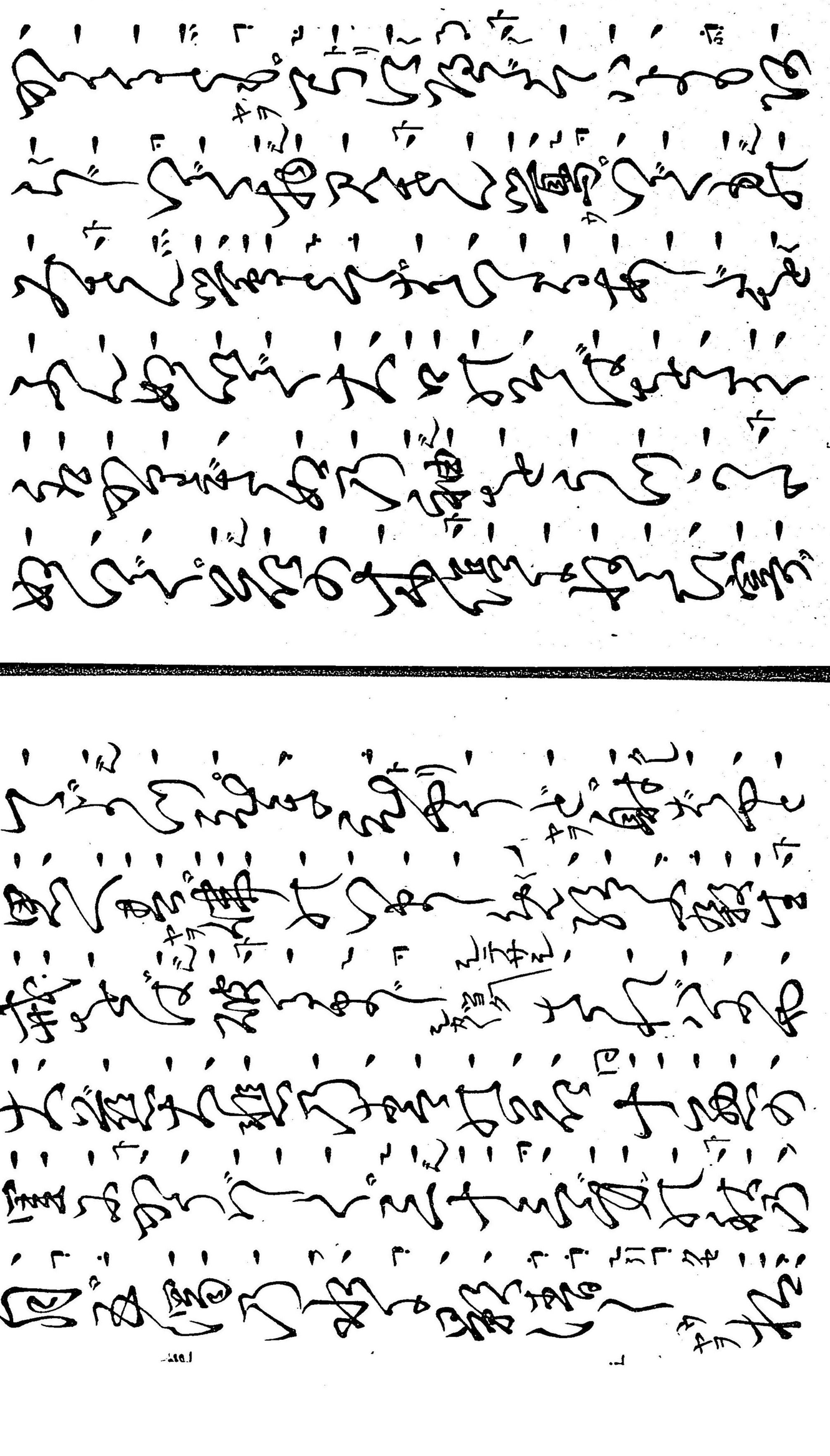




長刀をおしばらせ自ら射て
うたれおちれば大力おちる
だてらい的射んずめ入うる為
に猪籍乃小島を射落さん
ゞ為ぞう。異国の揭由八百弟
子柳は塔をうれく桃は百年を

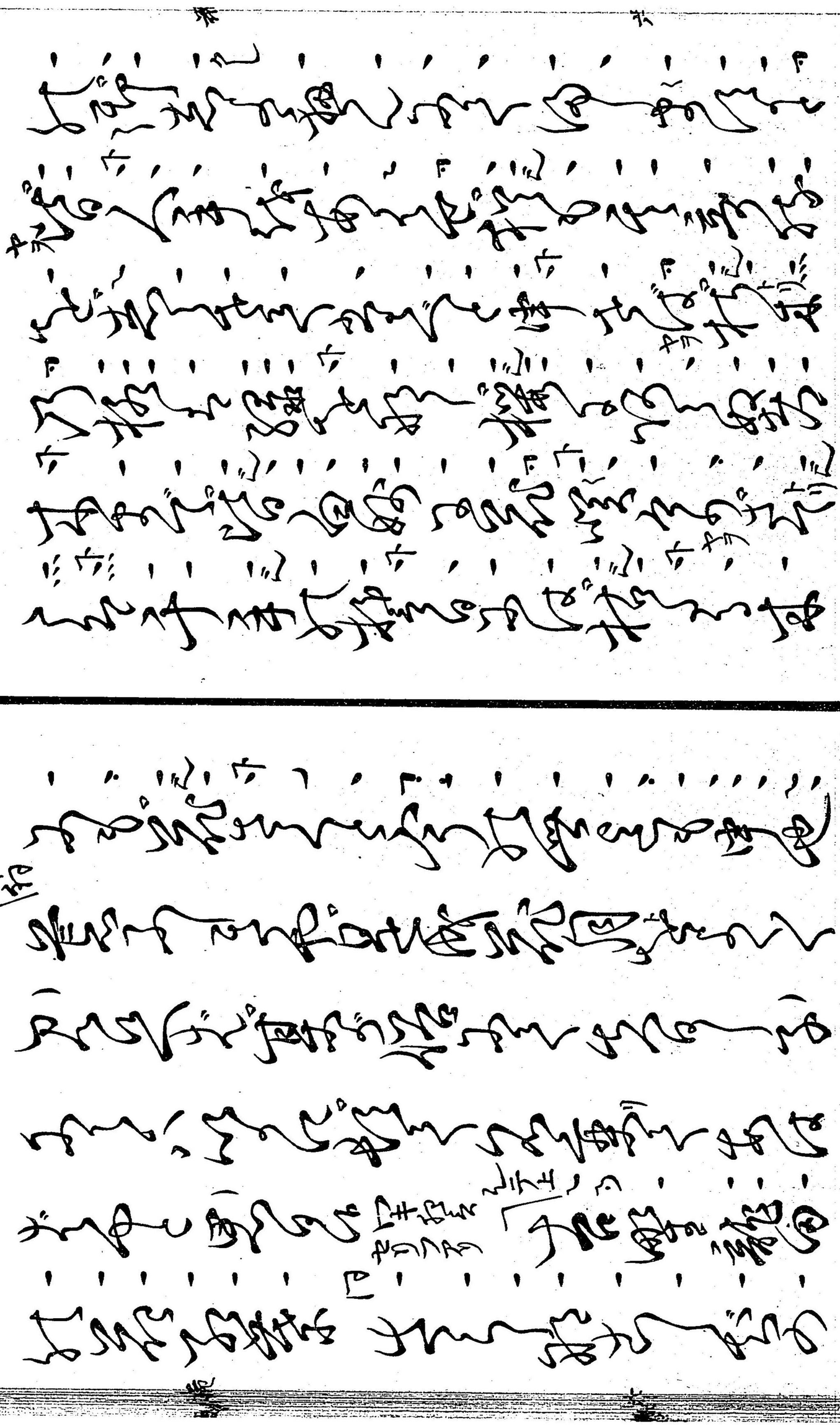
射ずまぢぞ我らまる兵乃
指乃篭をいくれおちんとおちよ
うれハぞ揭ぞ[illegible]
[illegible]
あう前うるあ
[illegible]
揭ぞうれる鷹ぞ
ぞうる柳ぞ日を

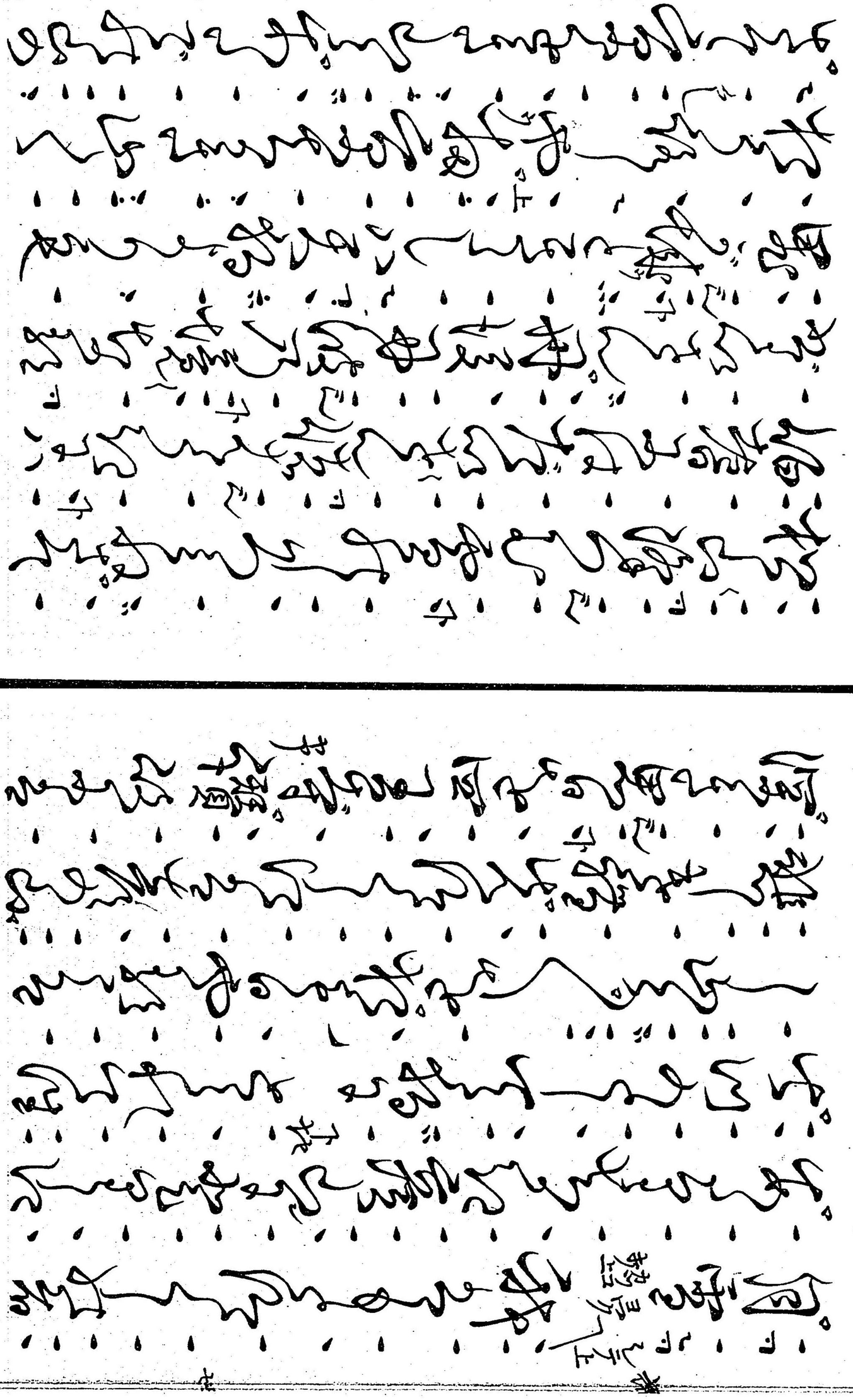
[illegible]



ヤヲハの田村丸が同二年
はまの草刈りしてゐる
ゆも音羽山の嶺の杉えだ
ヤヲハ知
ぶとりにぶとりにおもはれて清水の
ヤヲハ
ぶれを飛ぶらん鳴る時
は瀧の水ぶとりて落れ

ぶれをゆやめよのぶぶ水と
を雲ぶとりにぶとりぶとりの石乃
ヤヲハ
洞乃ぶとりの流れに埋れる石
ぶ音杉の杉あるのぶぶより
ぶれはぶぶる雲乃方に雲ぶれば
上ヒテ
ヤヲハ
ぶ者ぶぶ雲ぶ有ぶ楊柳祝

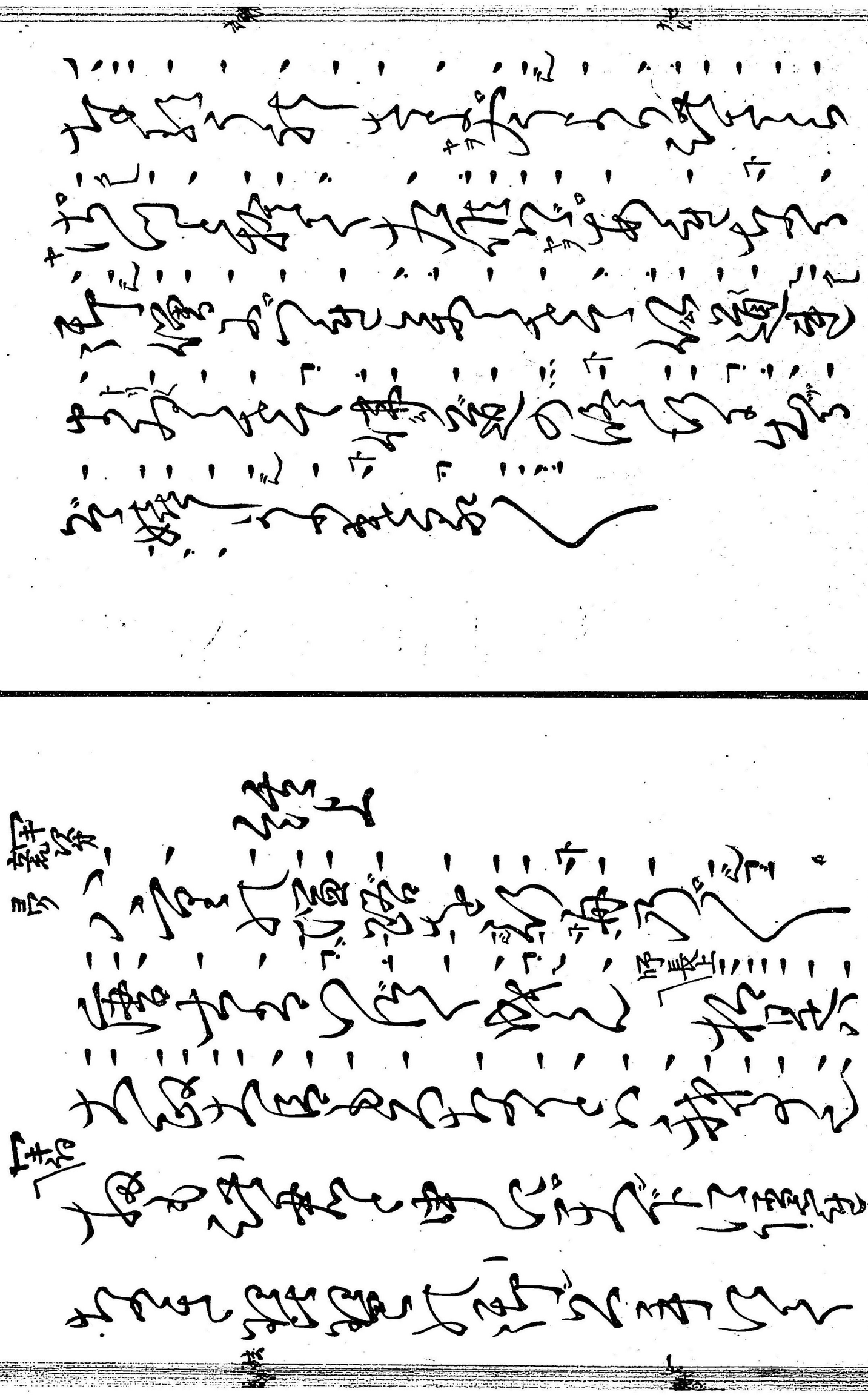




[illegible]

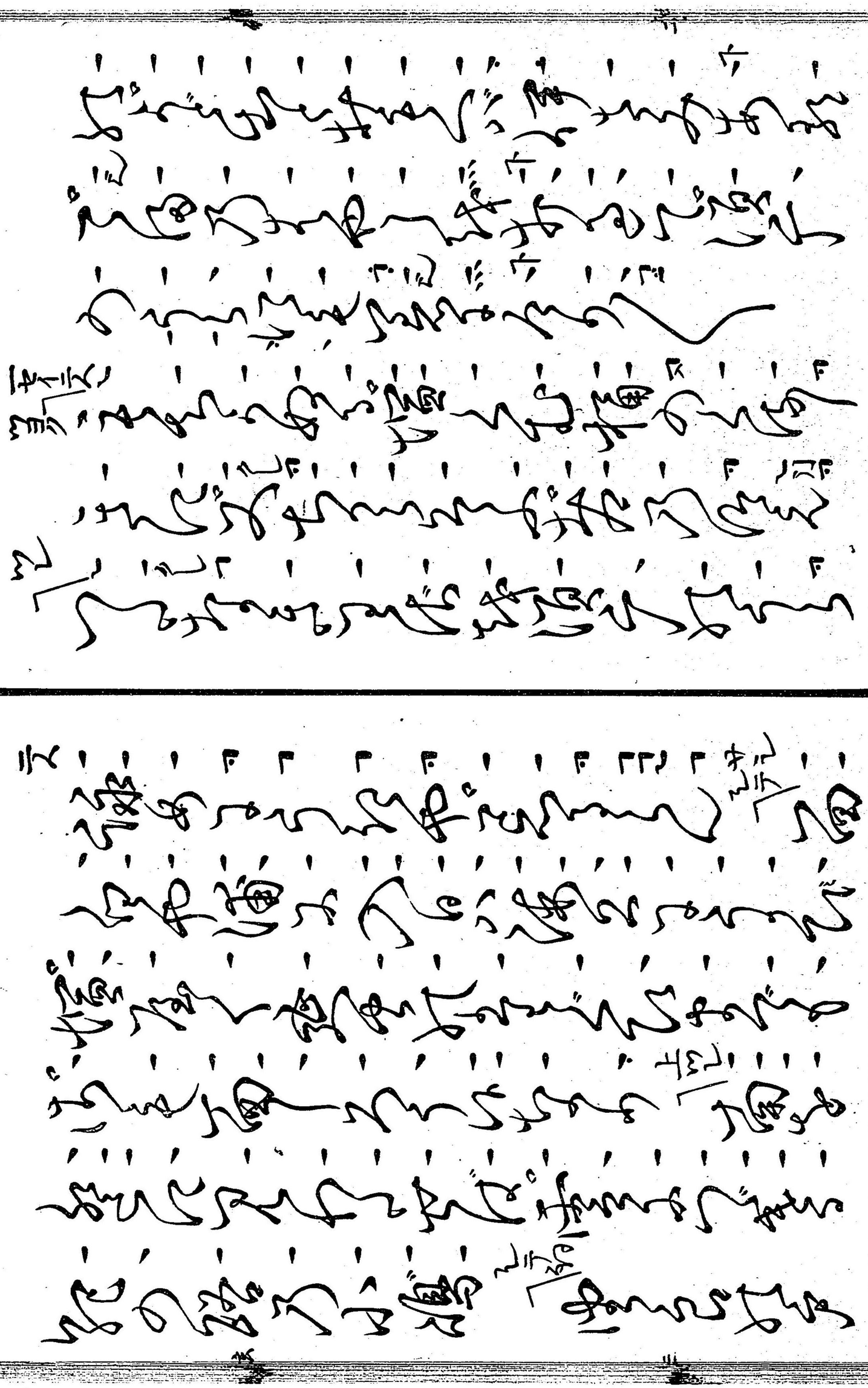
[illegible]

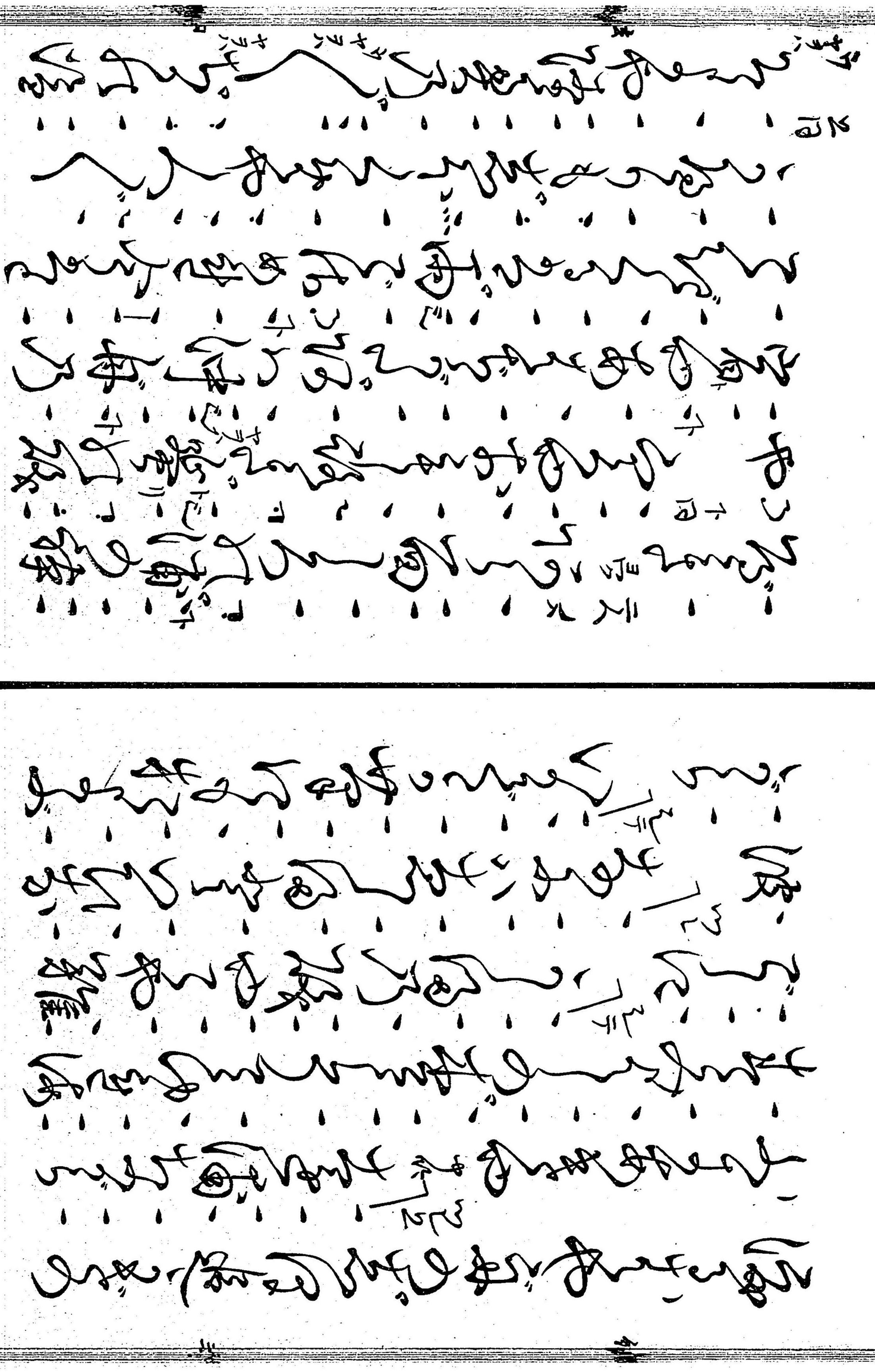
[illegible]



出でぬ八雲乃山路望ふまゝ
より詠ぬ思ふこゝろ山道たゞ
ゝ
ゝ和の月をも出ぬ賢さん高る
ぬ八津乃国浦こゝ乃ゝに
出下向ゝ（呼世）
ゆゝべを都の方ぞ恋ふ

詠キ
みゝ指ぞゝく山路
もぬれハ踏ゝ
こゝ神の湊ぢ（ウヤ）（トリ）ぬ
方ゝもゝれる
月を求ぬ
指の道ぞわ





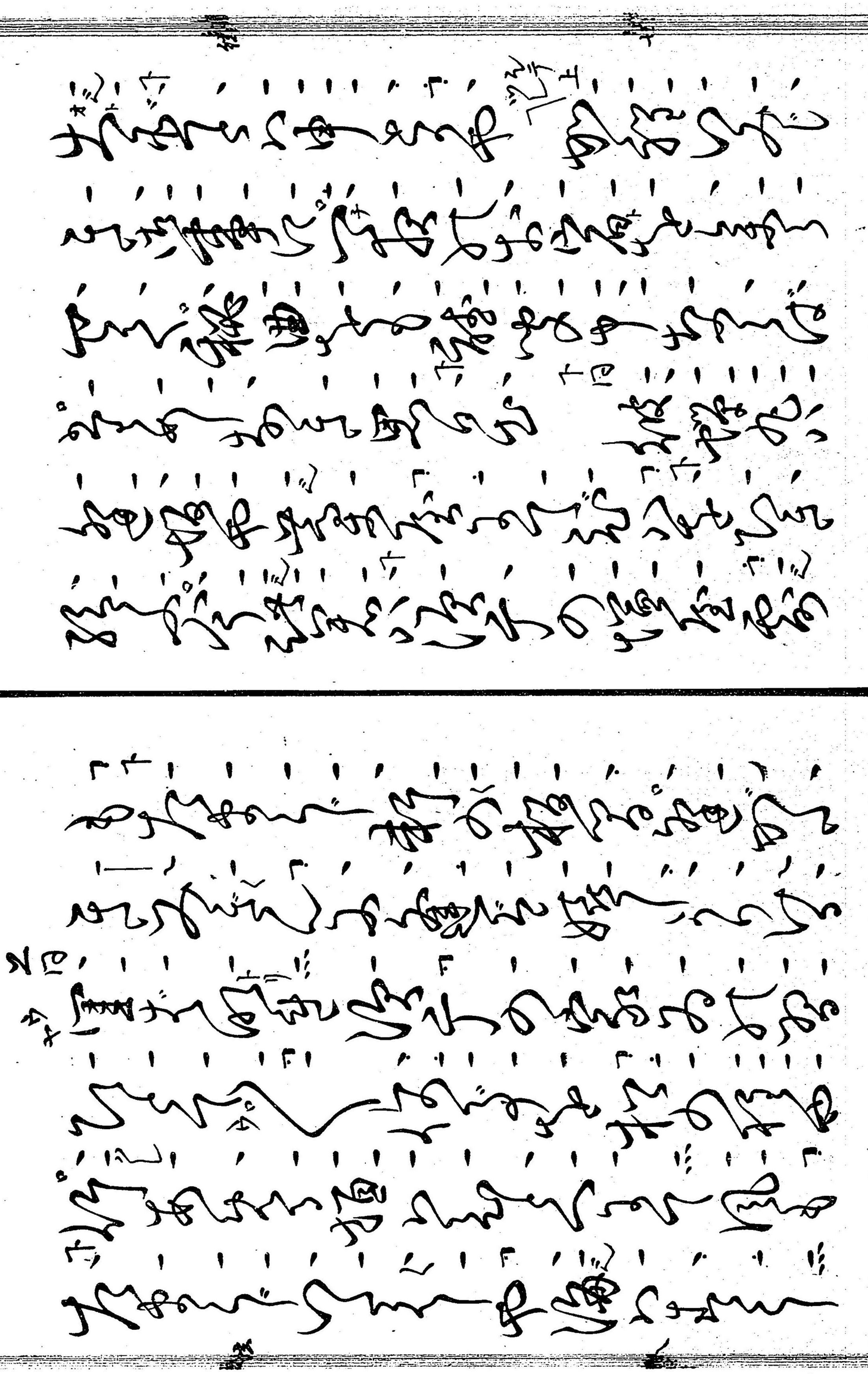
[illegible]ばかりの[illegible]まきれば
[illegible]ばかりとぐ[illegible]ばかり[illegible]湯やの[illegible]
[illegible]ばかりの[illegible]ばかりねて
[illegible]ばかりの[illegible]ばかり
いだかれむ[illegible]ばかり
[illegible]ばかり
人あり[illegible]ばかり[illegible]

[illegible]ばかり[illegible]むく
[illegible]ばかり[illegible]屋より休まむやと言
い[illegible]ばかり
塩屋乃主れ帰りてしば
宿をもとめむやとなげふ法師
屋乃ちゝ家の内中は[illegible]
法師ばかりぞ[illegible]ばかり[illegible]

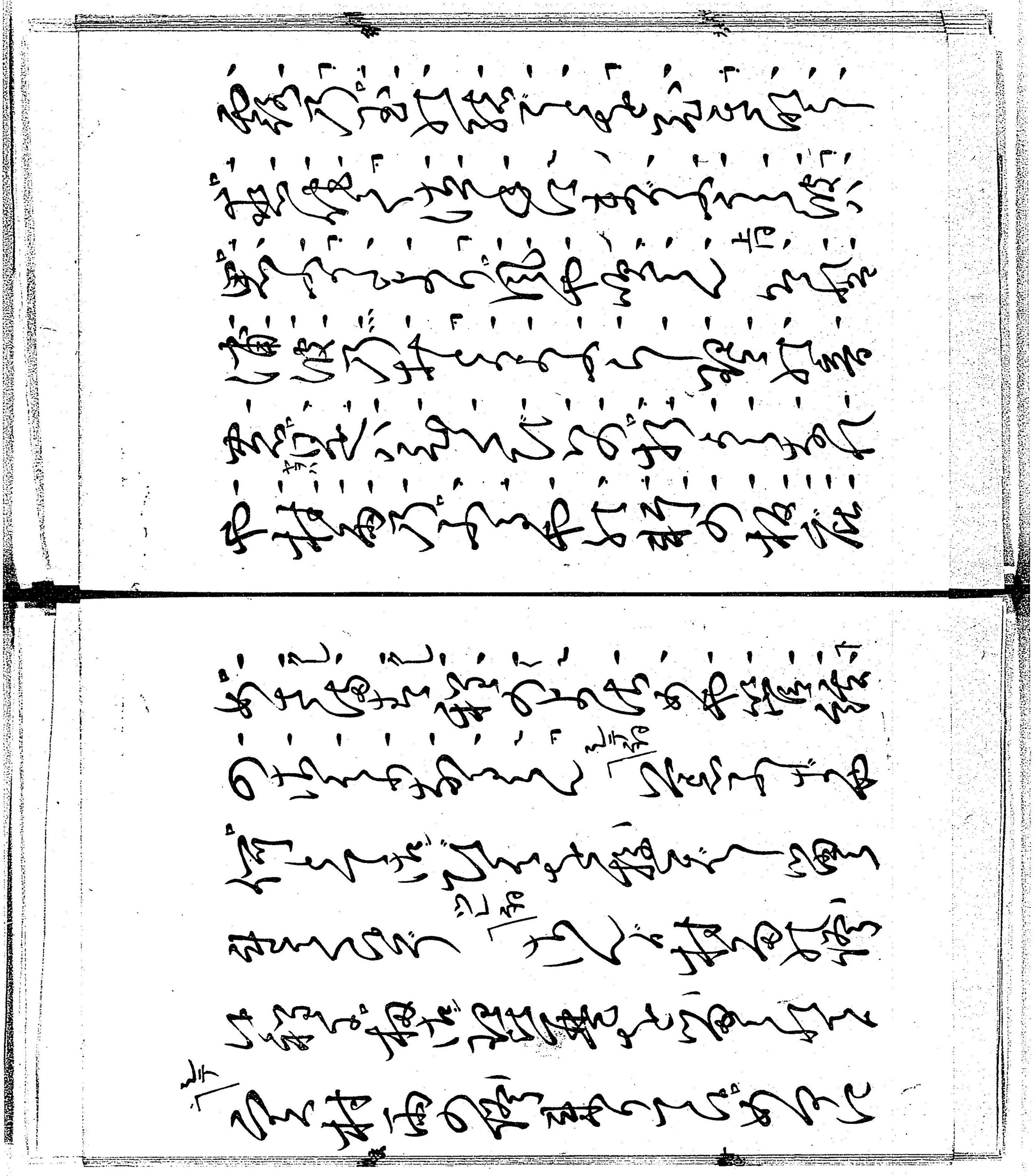
乃宿を出うて　に　さばくに
出待くるまでもなくいつ
みやに指くのがかなはぬお
宿なれば　に　何指くのお宿と
ぞや　に　さんぬ　に　何ものの人参り
くに移るまで留まてお宿めさ

れまうて申さく　に　うちとけまゐ
てくだぎまうぞ移るまでと
浦みまうぞ宿なれと仰せ
ぎくで浦まうに雑波浦まうて
まうて申ぐまれば是まで頂こうぞ
みまくはいけぬの　に　何なみまく

ばくぶお宿まいませたるぶさて
是をいかたちにかまつりぶ
ぐ　宇
めつけてうまに是をたてまつハ
ぶぐどいはまをこゆまはぬ野辺
乃はたをまはしまくはのくへ
唐のはたを須ゑれ浦みはたを
みるに紙墨ハ下年ハ雨れ彩ゑの
はたを為ゑ神泉苑まて野辺乃
秋ぶをとをぶ　れしかば詠ぶ
ぶぐるるぶ雨ぶ晴天
御ゑ雲のぶ雨ぶる事ぶ
ありぶ　下ん
ありぶまして紙墨ぶ雨の



[illegible]
[illegible]
[illegible]

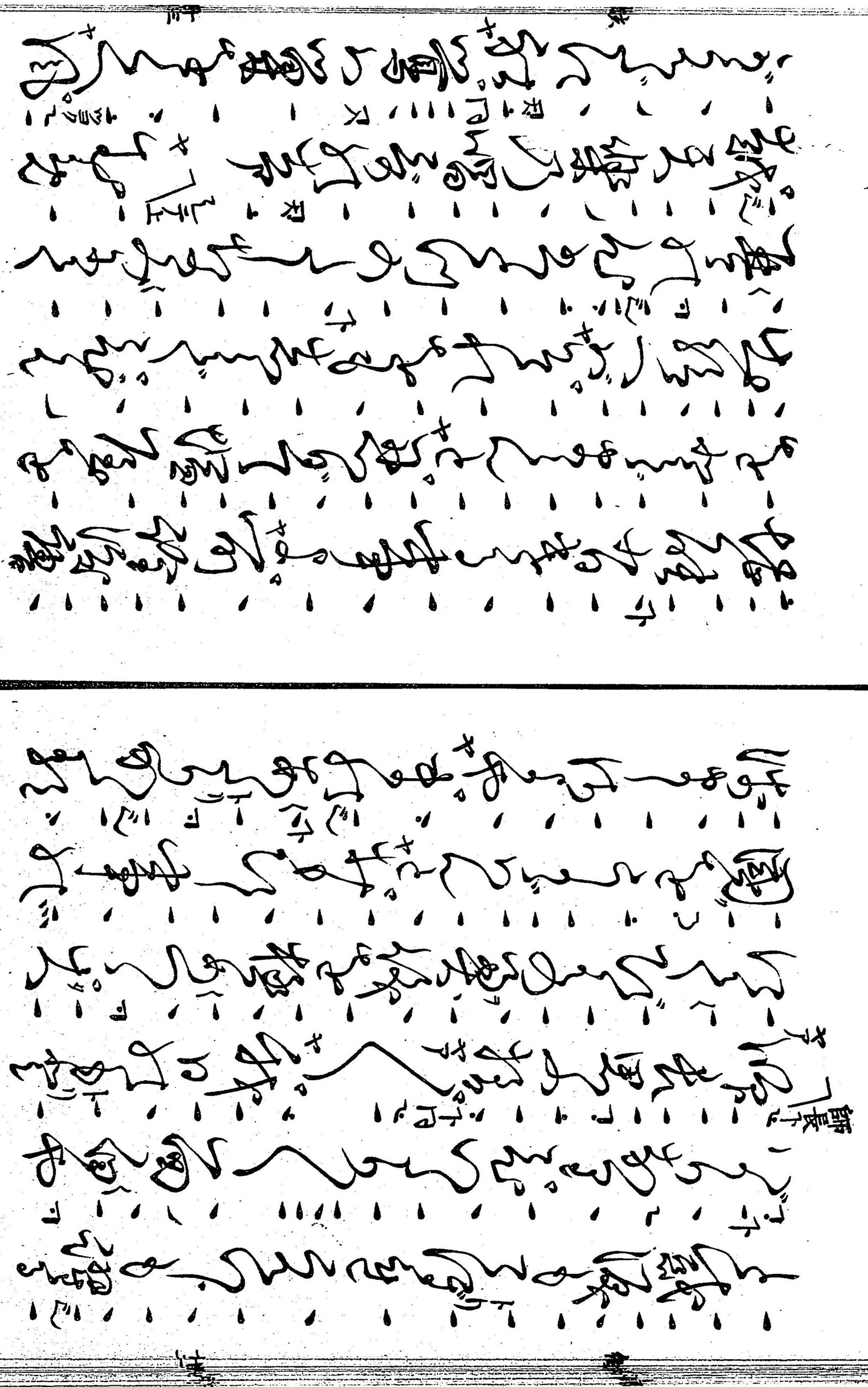


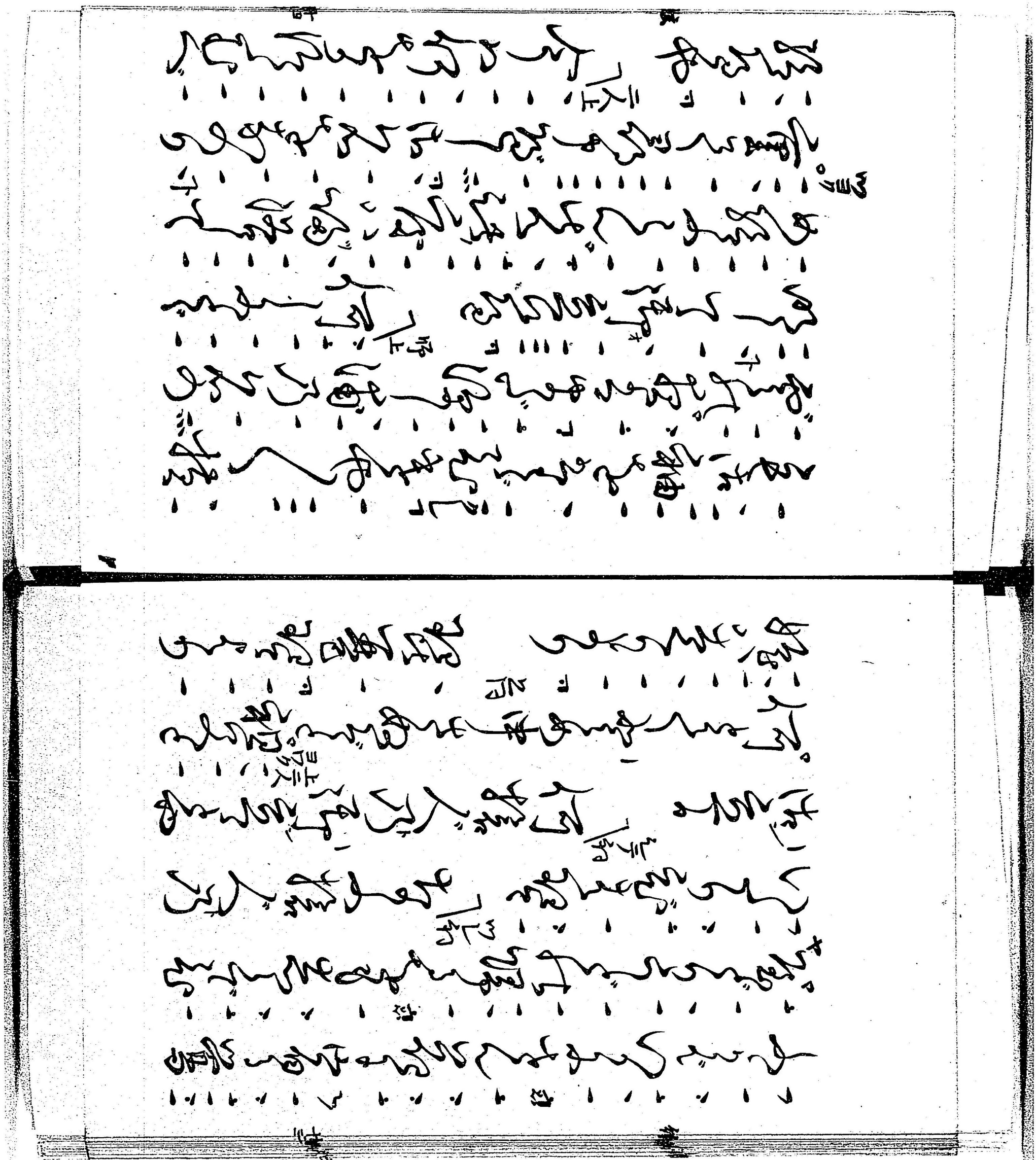
うばがたをしん　ばかりなるをば仮
しいたきいぞて　なるまく板屋
をふきかくて　静よ神谷中ばら
ぎ　いばくまきたばこ入れ
和又ゝ嫁ゝ　なるを
出し　ゝ　ゝ　ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]





[illegible]
天皇勅書乃御[illegible]
上方
はかの[illegible]書かゝ[illegible]
中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

村ヲ上
抑是ハ延喜五年代乃御[illegible]
村[illegible]の天皇[illegible]
師上
[illegible]代乃はか[illegible]
[illegible]
村
[illegible]
[illegible]
山ハ仁和寺お[illegible]

守覚法親王御相傳 村 「さて」

九の竜の下界の事

師 「玄ようくばくばくばくと

さく甚深のさとりを乃ち九村

ゆうちぐや 「伊ぐ玉出

ちさんと濃くなる海の水

上月 八月 あと

白 八月 八月 下界の龍神

手に持ち丸持ちて手の中

さくまくまくまくばうく

ばんの竜めを引つきく御手

毒を持ち引きだもちて

ひとり形ちばんの龍王結宮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

249
1

著作權所有

寛政十一年三月初版
明治二十六年七月改訂三版
明治四十三年六月增訂五版
明治四十四年八月廿五日增訂六版印刷
明治四十四年九月一日發行

嘉永六年五月再版
明治三十五年八月改訂四版

故

著作者　寶生太夫

著作者　東京市深川區吉永町七番地　寶生九郎

發行兼印刷者　東京市日本橋區通四丁目八番地　江島伊兵衛

發行所　東京市日本橋區通四丁目八番地　椀屋謠曲書肆